

International Lymphoedema Framework Japan 12th Annual Meeting

第12回 国際リンパ浮腫フレームワーク・ ジャパン研究協議会学術集会

プログラム・抄録集

浮腫ケア未来創成

Future generation of edema care



» 会 期

2023年9月17日(日)

オンデマンド配信期間:2023年10月1日(日)~30日(月)

» 会場・開催方法

石川県立看護大学(現地+LIVE+オンデマンド)

» 大会長

臺 美佐子 Misako Dai PhD, RN, CLT

石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授

ナースがエコーを使って アセスメント・臨床力アップ

照林社の看護に役立つ実践書



役立つ! 使える! 看護のエコー

編集◎真田 弘美、藪中 幸一、野村 岳志

定価：3,520円（本体 3,200 円＋税） AB 判／160 頁／ISBN978-4-7965-2462-9

エコーの基礎知識、画像の見かた取りかたを、さまざまな臨床シーン別にわかりやすく解説。血圧計や聴診器のようにエコーを使いこなせるようになれば、より正確な看護アセスメントができるようになる。

エコーを用いる 点滴トラブル予防を目指した 末梢静脈カテーテル留置技術 ベストプラクティス

編集◎看護理工学会

定価：880 円（本体 800 円＋税） A4判／40 頁
ISBN978-4-7965-2560-2

末梢静脈カテーテル留置技術による点滴トラブルの実態から、一歩進んだトラブル防止のための具体的な技術として、「エコーを用いた末梢静脈カテーテル留置技術」を紹介。



エコーによる 直腸 便貯留 観察 ベストプラクティス

編集◎一般社団法人 日本創傷・オストミー・失禁管理学会、看護理工学会

定価：880円（本体 800 円＋税） A4判／36 頁／ISBN978-4-7965-2539-8

エコーを用いて直腸内の便貯留を観察し、便秘の診断に早期につなげる方法を解説。高齢者、特に認知機能障害のある患者の便秘治療・ケア、正しいアセスメントに役立つ。



照林社

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 営業部：TEL(03)5689-7377

●当社ホームページにて試し読みができます！ ▶ <https://www.shorinsha.co.jp/>

ホームページは
こちらから



第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会学術集会

【開催概要】

大会長 臺 美佐子（石川県立看護大学）
テーマ 浮腫ケア未来創成
期 日 2023 年 9 月 17 日（日）
時 間 学術集会 9：00 ～ 16：00
市民公開講座 16：00 ～ 17：00
会 場 石川県立看護大学 ハイブリット開催（対面・ライブ配信・オンデマンド配信）

【実行委員組織】

事務局 長 三浦 由佳（藤田医科大学）
実行委員長 松本 智里（石川県立看護大学）
企画運営委員 今方 裕子（石川県立看護大学）
仲上 豪二郎（東京大学）
アカデミックアドバイザー
真田 弘美（石川県立看護大学）
須釜 淳子（藤田医科大学）
紺家 千津子（石川県立看護大学）

実 行 委 員

林 明辰（亀田総合病院 リンパ浮腫センター）	額 奈々（石川県立看護大学）
峰松 健夫（石川県立看護大学）	津田 裕子（石川県立看護大学大学院）
戸部 浩美（石川県立看護大学）	石井 光子（石川県立看護大学大学院）
大貝 和裕（石川県立看護大学）	後藤 亜希（石川県立看護大学大学院）
松本 勝（石川県立看護大学）	窪田 晃奈（石川県立看護大学大学院）
長谷川 陽子（石川県立看護大学）	越田 美晴（石川県立看護大学大学院）
大西 陽子（石川県立看護大学）	加藤 克典（石川県立看護大学大学院）
佐能 唯（石川県立看護大学）	森田 美穂子（石川県立看護大学大学院）
瀧澤 理穂（石川県立看護大学）	山根 匡博（石川県立看護大学大学院）

当日運営委員

青木 未来（福井大学）	小柳 礼恵（藤田医科大学）
市丸 徹（石川県立看護大学）	佐藤 文（川崎市立看護大学）
上田 映美（公立小松大学）	鈴木 由依子（公立小松大学）
浦井 珠恵（富山県立大学）	村山 陵子（藤田医科大学）
大桑 麻由美（金沢大学）	松井 優子（公立小松大学）
北村 言（東京大学）	横野 知江（新潟大学）
木森 佳子（公立小松大学）	四谷 淳子（福井大学）

ボランティアスタッフ

石川県立看護大学 看護学部 学部生

第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会学術集会

目 次

大会長挨拶	1
理事長挨拶	2
開催校 学長挨拶	3
◆ご案内	
会場案内図	4
日程表	5
学術集会に参加される方へ	6
学術集会日程	7
◆抄録	
会長講演	10
特別講演Ⅰ	11
会長企画演題	16
シンポジウム	19
ランチョンセミナー	23
特別講演Ⅱ	25
教育講演	26
スイーツセミナー	27
ワークショップ	30
一般演題	31
市民公開講座 講演会	39
市民公開講座 演奏会	40
◆協賛企業	
協賛企業一覧	41

大会長挨拶

「浮腫ケア未来創成」

石川県立看護大学 成人・老年看護学講座 教授
国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 理事

臺 美佐子



第12回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会（ILFJ）学術集会を、石川県立看護大学とオンラインとのハイブリッド形式で開催させていただきます。このような大役を務めさせていただくにあたり、多くの方々に日々ご支援と激励をいただきました。まずは、心より感謝申し上げます。

今回の学術集会のテーマは「浮腫ケア未来創成」といたしました。ILFJがInternational Lymphoedema Framework（ILF）の日本支部として創設されてから世界の約20カ国と共に歩んでまいりました。浮腫管理の質を向上させることに真摯に向き合い、これほど国際的な協働をしてきた組織は他に類をみないのではないのでしょうか。これは真田弘美初代理事長、須釜淳子現理事長、浮腫管理の専門家・研究者である全理事、会員の皆様の熱い想いが創った財産であり、多くの若手研究者の育成の場にもなりました。

私もまた、このILFJで育てていただいたひとりです。ILF創設者のChristine Moffatt教授、ILFJ創設の諸先生方から、当時大学院生だった私は「リンパシスターズ」と呼ばれ、大変嬉しく誇りに思っていたものでした。あれから時がたち、リンパシスターズの一員の私が大会長を拝命するに至りました。これこそまさに若手の人材育成を支援するILFJの方針そのものが体現されていると実感しております。私に期待されていることは、浮腫ケアの未来を創成するべく、これまでの軌跡を軸として国際的な協働を発展させながら、浮腫管理のさらなる質向上に向けたエビデンスの創成と人材の育成であろうと考えます。

本学術集会では、これまでの軌跡を軸に、未来創成への新たな展開について、臨床的視点、科学的視点、国際的視点からディスカッションする機会をつくりたいと考えています。また、若手研究者育成の観点から様々なアイデアもプログラムに取り入れました。さらに、参加者の皆様に癒しの時間をお届けしたく、演奏会を含めた市民公開講座も開催いたします。

浮腫ケアの未来創成に向けた一步を、皆様とともに歩めることに感謝し、学び、交流し、そして癒しの時間を共有できますことを楽しみにしております。

理事長挨拶

「第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ ジャパン研協議会学術集会開催に期待すること」

藤田医科大学保健衛生学部看護学科 教授
藤田医科大学社会実装看護創成研究センター センター長
国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 理事長
須釜 淳子



第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 学術集会は、2022 年 11 月に理事長に就任してから、初めての学術集会となります。新型コロナウイルスの影響を受け、2020 年延期、2021 年と 2022 年にオンライン開催となり、4 年ぶりのオンサイトでの開催となります。

ご存知のとおり、本会は国際リンパ浮腫フレームワークの趣旨に賛同し、国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会として、設立した経緯があります。国際リンパ浮腫フレームワークの WEB サイトを見ると、各国が独自の活動を積極的に行ったり、virtual conference 開催など国際的に連帯する取り組みを行ったりと、同じ目標“Creating a better everyday life for people living with lymphoedema and related disorders”に向かって進んでいることがひしひと伝わってきます。今回の学術集会においても国際共同研究の取り組みが発表されますが、おそらく各国のデータと比較することで、日本特有のリンパ浮腫をはじめとする慢性浮腫管理に関する現状や課題が浮き彫りにされるのではないかと考えます。会員数の規模からみると小さな本会ですが、「リンパ浮腫をはじめ慢性浮腫を有する人々のより良い日常を創りたい」という強い意思をもって、実践、研究、教育に真摯に取り組まれている会員の皆様と共に歩んで参りたいと思います。

スイーツセミナー、ワークショップ、市民公開講座などオンサイトならではのプログラムが盛りだくさんに企画されています。久しぶりに私の故郷の地（石川）でお会いし、語り合えることを楽しみにいたしています。

略歴

藤田医科大学保健衛生学部看護学科 教授・同社会実装看護創成研究センター センター長。1985 年国立千葉大学看護学部看護学科卒業、金沢大学医学部附属病院勤務（看護婦）、1988 年金沢大学医療技術短期大学部助手、同看護学科助手、1999 年金沢大学医学部保健学科助教授、2005 年金沢大学大学院医学系研究科博士後期課程 保健学専攻修了 博士（保健学）、2006 年金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻 教授を経て 2021 年より藤田医科大学社会実装看護創成研究センター センター長。2022 年より藤田医科大学保健衛生学部看護学科教授と兼務。2008-2011 年東京大学大学院医学系研究科アドバンストスキンケア（ミスパリ）寄附講座客員教授。2009-2016 年金沢大学医薬保健研究域附属健康増進科学センター 教授。2013-2016 年センター長。2016-2021 年金沢大学新学術創成研究機構 革新的統合バイオ研究コア 先端的ヘルスサイエンスユニット ユニットリーダー。2019 年より看護理工学会理事長。2019-2021 年日本看護科学学会副理事長。2021 年より日本創傷オストミー・失禁管理学会副理事長。2023 年より国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会理事長。褥瘡管理やスキンケアを中心に、基礎研究から臨床現場での社会実装に至るまで幅広い活動を行っている。

開催校 学長挨拶

「ようこそ石川県立看護大学へ ようこそ日本のフィンランドへ」

石川県立看護大学 学長
国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 初代理事長

真田 弘美



このたびは、第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会学術集会開催、誠にありがとうございます。開催地の石川県立看護大学学長として、国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会 (ILFJ) の初代理事長として、心から嬉しく思います。

今回、International Lymphoedema Framework (ILF) 創立者のモファット先生 (Prof. Chrstine Moffatt) が学術集会でご講演されることに伴い、モファット先生との出会いが ILFJ 創設につながったことを、ぜひ皆様にご紹介したいと思います。モファット先生との出会いは、2007 年に東京大学で開催した創傷スキンケアセミナーでした。ご講演でリンパ浮腫ベストプラクティスをご紹介くださったことに、私は大変感銘を受けました。日本に普及させたい一心で、リンパ浮腫専門家を全国から募り、一緒に翻訳して日本語版を発刊したのです。この影響は大きく、本邦のリンパ浮腫管理を行う医療者の多くが読み、そしてリンパ浮腫ガイドライン策定にも繋がりました。そして、ベストプラクティス作成時に集ったメンバーと共に ILF の日本支部である ILFJ を創設いたしました。それから約 13 年間、ILF との共同プロジェクトに参画し、国内外の浮腫管理の質向上に向けて尽力してきました。いずれも、日本の医療者の皆様にもご協力いただいた成果で、ILFJ の財産といえます。

本学術集会では、これまでの ILFJ の活動の軌跡を知っていただくとともに、今後 ILFJ から発信する国際共同研究に世界が参画する未来についても語らう場になることを期待しています。日常に医療者が遭遇するリンパ浮腫に限らず、がんの治療による浮腫、高齢者の浮腫等、といった「浮腫」などの慢性浮腫に関しても、新しい学びの場となることも期待しております。HP からも学会誌を毎年出しております。時間許す限り、国際論文、本邦の論文にも興味を持っていただけると大変うれしく思います。

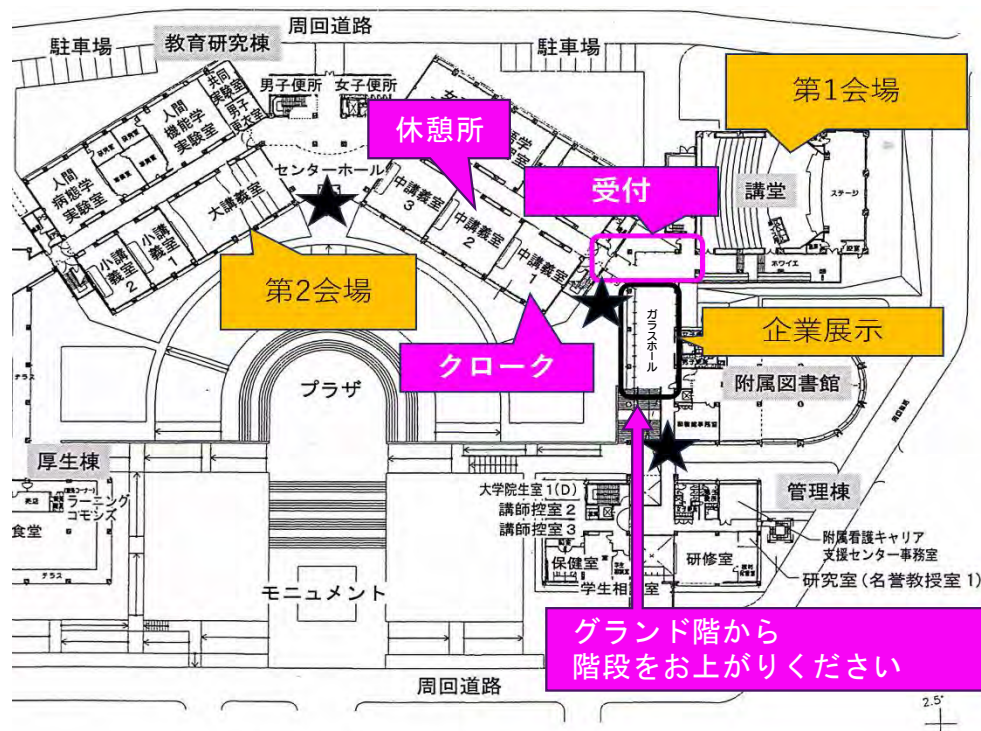
石川県立看護大学は、大変美しいキャンパスで、私が“日本のフィンランド”と呼ぶ海と広大な敷地の大学、周りにある洋風の家々はかほく市にあります。このキャンパスで新たな学びや交流が深まる一日となることでしょう。もちろん、オンラインで参加の皆様も貴重な時間を共有できることと確信しております。

学術集会で、皆様とお会いできますことを、心から楽しみにしております。

略歴

石川県立看護大学学長。東京大学名誉教授。1979 年聖路加看護大学卒業、1987 年クリーブランドクリニック聖路加分校 ET スクール修了、1989-90 年イリノイ大学大学院看護学部にて研修、1987-97 年金沢大学医学部研究生 博士(医学)、1998 年金沢大学医学部保健学科教授、2003 年東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻老年看護学分野教授、2022 年より現職。日本看護協会：元副会長 (2011-2017)。国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会：前理事長、日本褥瘡学会：元理事長 (2011-2015)、日本創傷・オストミー・失禁管理学会：元理事長 (2008-2017)、看護理工学会：前理事長 (2013-2019)、日本看護科学学会：前理事長 (2019-2021)、日本創傷治癒学会 名誉会員 (2022～)、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会 名誉会員 (2023～)。

会場案内図



校舎 1 階平面図



校舎 2 階平面図

★ 災害時の出入り口

日程表

第1会場 講 堂		第2会場 大講義室	第3会場 成人・老年看護学実習室	展示会場 ガラスホール
9:00	9:00-9:15 開会式 LIVE ビデオ			9:00
	9:15-9:35 会長講演 LIVE ビデオ 浮腫ケアのエビデンス創成と世界への発信 座長：須釜 淳子 演者：臺 美佐子			
10:00	9:35-10:05 特別講演Ⅰ LIVE ビデオ Latest science news from international research on ILF 座長：吉沢豊予子、小林 範子 演者：Prof. Christine Moffatt Dr. Martina Sykorova (共催：株式会社ベーデル・プラス)			10:00
	10:05-10:35 会長企画演題 国際共同プロジェクトの日本調査報告 座長：紺家千津子、仲上豪二朗 演者：上田 映美、今方 裕子 LIVE ビデオ 田崎あゆみ	10:05-10:55 LIVE ビデオ 一般演題Ⅰ リンパ浮腫の診断と治療 座長：大桑麻由美、峰松 健夫		
11:00	10:45-11:55 LIVE ビデオ シンポジウム 国際共同研究推進に向けた新戦略 座長：須釜 淳子、臺 美佐子 演者：仲上豪二朗、大江 真琴 新谷 歩、島津 太一	11:05-11:55 LIVE ビデオ 一般演題Ⅱ リンパ浮腫の評価とケア 座長：内藤亜由美、大貝 和裕		11:00
12:00		12:05-13:05 LIVE ランチョンセミナー 国内及び海外におけるIPC (間欠型空気圧式マッサージ器)の動向 座長：品岡 玲 演者：北山 晋也、佐藤佳代子 (共催：株式会社テクノ高槻)		12:00
13:00	13:15-14:00 LIVE ビデオ 特別講演Ⅱ 臨床と研究とのコラボレーションで目指す 看護の未来 座長：真田 弘美 演者：眞野 恵子			13:00
14:00	14:00-14:40 LIVE ビデオ 教育講演 小児リンパ浮腫に対する 複合的理学療法の実践 座長：小林 範子 演者：佐藤佳代子	14:00-14:40 LIVE ビデオ 一般演題Ⅲ 症例報告・実践報告 座長：佐藤 文、時山 麻美		14:00
15:00		14:50-15:30 スイーツセミナー リンパ浮腫ケアの在宅医療と遠隔化 座長：作田 裕美、増島麻里子 演者：岡田 正規、小川 佳宏 松本 智里 LIVE ビデオ (共催：ディビュラメディカルソリューションズ株式会社)	14:50-15:30 ワークショップ エコアセスメントと リンパドレナージ体験 進行：紺家千津子、今方 裕子 エコアセスメント：三浦 由佳、松本 勝 リンパドレナージ：荒井よう子、高地 弥里	15:00
16:00	15:40-16:00 LIVE ビデオ 閉会式			16:00
	16:00-17:00 LIVE ビデオ 市民公開講座			
17:00				17:00

【学術集会に参加される方へ】

1. 総合受付

場所：1階 ガラスホール奥

1) 事前登録をされた方

- ・事前に発行されている参加証を各自で印刷してご持参ください。
- ・当日の受付は不要です。

2) 当日参加登録される方

- ・総合受付の各受付で学会参加費をお支払いください。

会 員 [会員当日受付] 8,000 円

非会員 [非会員当日受付] 9,000 円

学 生 [学生当日受付] 無料

- ・参加費と引き換えに、参加証（ネームカード）をお受け取りください。
- ・お支払いは現金のみ承ります。
- ・学生の方（就業しながらの大学院生を除く）は、学生証をご提示ください。

3) 参加証（ネームカード）について

会場にご入場の際には、必ず参加証を着用してください。

参加証用ホルダーを用意しておりますので、首から下げてご使用ください。

2. 発表会場および管内の利用について

- ・発表者の承諾を得ずに、発表に関わる撮影・録音を行うことは禁止とさせていただきます。
- ・本学術集会の会場以外への入場はお控えください。

3. その他

1) 昼食のご案内

- ・ランチョンセミナーをご利用ください（会場内やその周辺にコンビニエンスストアはありませんのでご注意ください）。

2) クローク

【設置場所】 中講義室 1

【開設時間】 8:00～17:30

- ・手荷物をお預かりします。荷物はできる限りおまとめくださいますようお願いいたします。
- ・貴重品、パソコン、壊れやすいものはお預かりできません。
- ・保管の責任は当方では負いかねますのであらかじめご注意ください。

3) 会場と金沢駅間のバスのお知らせ

- ・当日、学術集会専用の便がございます。学会ポスターを持った案内係を目印にしてください。
金沢駅西口 8:00 発 会場行き
会 場 17:20 発 金沢駅西口行き

4) インターネット環境について

- ・会場にフリーWi-Fi はありませんので、ご注意ください。

5) 会場内での呼び出し

- ・各会場での呼び出しは行いません。お困りの際は会場内のスタッフにお声かけください。

6) 災害発生時の避難

- ・災害発生時は各会場の避難アナウンスに従ってください。
- ・会場では非常口や避難経路をご確認ください。避難時にエレベーターは使用しないでください。

7) 救護室について

- ・救護室は学会本部内がございますので、必要時にはスタッフにお申し出ください。

【学術集会日程】

開会式 9:00-9:15 第1会場

開会の辞：真田 弘美（石川県立看護大学 学長・ILFJ 初代理事長）

理事長挨拶：須釜 淳子（藤田医科大学 教授・ILFJ 理事長）

会長講演 9:15-9:35 第1会場

座長：須釜 淳子（藤田医科大学保健衛生学部看護学科 教授・藤田医科大学社会実装看護創成研究センター センター長）

「浮腫ケアのエビデンス創成と世界への発信」

臺 美佐子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

特別講演 I 9:35-10:05 第1会場

座長：吉沢豊予子（関西国際大学 保健医療学部 教授）

小林 範子（北海道大学病院 婦人科 講師）

「Latest science news from international research on ILF」

1. 「Validation of LYMPHOQOL: quality of life in children and young people living with lymphoedema」《Video》

Prof. Christine Moffatt (International Clinical Nursing at Nottingham Trent University, the University of Nottingham, UK.)

2. 「ILF-COM Chronic oedema scoping review: preliminary insights」《Video》

Dr. Martina Sykorova (School of Health Sciences University of Nottingham United Kingdom)

共催：株式会社ベーター・プラス

会長企画演題 10:05-10:35 第1会場

座長：紺家千津子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

仲上豪二郎（東京大学大学院医学系研究科 老年看護学／創傷看護学分野 教授）

「国際共同プロジェクトの日本調査報告」

1. 「日本での生殖器リンパ浮腫の教育に関するニーズ：ILF Genital Oedema Project」
上田 映美（公立小松大学保健医療学部看護学科 准教授）

2. 「リンパ浮腫アウトカム調査 ILF-COM の日本調査報告」
今方 裕子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 講師）

3. 「小児リンパ浮腫患者用 QOL 評価尺度を用いた若者の QOL 実態調査」
田崎あゆみ（藤田医科大学保健衛生学部看護学科 小児看護学 准教授）

シンポジウム 10:45-11:55 第1会場

座長：須釜 淳子（藤田医科大学保健衛生学部看護学科 教授・藤田医科大学社会実装看護創成研究センター センター長）

臺 美佐子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

「国際共同研究推進に向けた新戦略」

1. 「リンパ浮腫研究への国際共同研究の役割と戦略：LIMPRINT への参画経験から」
仲上 豪二郎（東京大学大学院医学系研究科老年看護学／創傷看護学分野 教授）
2. 「糖尿病足潰瘍予防の取り組み：国際共同研究の挑戦」
大江 真琴（金沢大学医薬保健研究域保健学系 臨床実践看護学講座 教授）

3. 「今日から使える医療統計～基本編～」

新谷 歩（大阪公立大学大学院医学研究科医療統計学教室 教授）

4. 「エビデンスの創出と現場での実践をつなぐ実装研究」

島津 太一（国立がん研究センターがん対策研究所 行動科学研究部 実装科学研究室長）

ランチョンセミナー 12:05-13:05 第2会場

座長：品岡 玲（岡山大学医歯薬学総合研究科 むくみを科学する先進リンパ学講座 特任教授）

「国内及び海外における IPC（間欠型空気圧式マッサージ器）の動向」

1. 「本邦初リンパ浮腫治療機器の開発状況」

北山 晋也（横浜市立大学医学部形成外科 講師）

2. 「海外における間歇的空気圧迫装置（IPC）の活用状況について」

佐藤佳代子（合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所 代表）

共催：株式会社テクノ高槻

特別講演Ⅱ 13:15-14:00 第1会場

座長：真田 弘美（石川県立看護大学 学長）

「臨床と研究とのコラボレーションによる看護の未来」

眞野 恵子（藤田医科大学病院 副院長・統括看護部長）

教育講演 14:00-14:40 第1会場

座長：小林 範子（北海道大学病院 婦人科 講師）

「小児リンパ浮腫に対する複合的理学療法の実際」

佐藤佳代子（合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所 代表）

スイーツセミナー 14:50-15:30 第2会場

座長：作田 裕美（大阪公立大学大学院 看護学研究科看護学専攻 教授）

増島麻里子（千葉大学大学院看護学研究院 先端実践看護学研究部門 高度実践看護学講座 教授）

「リンパ浮腫ケアの在宅医療と遠隔化」

1. 「バーチャルホスピタルを目指した病院と在宅の看護連携アプリ」

岡田 正規（ディピューラメディカルソリューションズ株式会社 代表取締役社長）

2. 「リンパ浮腫ケアの在宅医療と遠隔化 ～現状と今後の展望～」

小川 佳宏（医療法人 リムズ徳島クリニック 院長）

3. 「リンパ浮腫患者に対する遠隔保存療法指導の試み」

松本 智里（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 准教授）

共催：ディピューラメディカルソリューションズ株式会社

一般演題Ⅰ 10:05-10:55 第2会場

座長：大桑麻由美（金沢大学医薬保健研究域保健学系 臨床実践看護学講座 教授）

峰松 健夫（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

「浮腫の診断と治療」

一般演題Ⅱ 11:05-11:55 第2会場

座長：内藤亜由美（東京医療保健大学 立川看護学部看護学科 准教授）

大貝 和裕（石川県立看護大学大学院看護学研究科 共同研究講座看護理工学 共同研究講座教授）

「浮腫の評価とケア」

一般演題Ⅲ 14:00-14:40 第2会場

座長：佐藤 文（川崎市立看護大学看護学部/川崎市立看護短期大学 看護学科 教授）
時山 麻美（ナースソフィア株式会社 訪問看護ナースソフィアにいかわ 取締役
がん看護専門看護師）

「症例報告・実践報告」

ワークショップ 14:50-15:30 第3会場

進行：紺家千津子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）
今方 裕子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 講師）

「エコアセスメントとリンパドレナージ体験」

エコアセスメント体験：三浦 由佳（藤田医科大学）・松本 勝（石川県立看護大学）
リンパドレナージ体験：荒井よう子（おおたプレストクリニック）・高地 弥里（石川県済生会金沢病院）

閉会式 15:40-16:00 第1会場

表彰式

次期大会長挨拶：佐藤佳代子（合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所 代表）

閉会の辞：臺 美佐子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

市民公開講座 16:00-17:00 第1会場

司会：臺 美佐子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

「コロナからの解放 癒しの空間でみつきたい 幸せな老後を迎えるヒント」

開会挨拶：真田 弘美（石川県立看護大学 学長）

1. 講演「しあわせな老いを生き、生ききる」

川島 和代（石川県立看護大学 看護学部 教授・看護学部長）

2. 演奏会

平尾 有衣（ピアノ）・林 佳南子（バイオリン）・林 辰則（トランペット）

閉会挨拶：塚田 久恵（石川県立看護大学 看護学部 教授・地域ケア総合センター・センター長）

高校生の学術集会体験

聴講型コース（特別講演Ⅰ）

世界のトップランナーから世界初の研究成果を聴く！雰囲気味わおう

参加型コース（ワークショップ）

皮膚の健やかさ&美しさを「むくみ」を通して見る&ケアする方法を伝授！

「浮腫ケアのエビデンス創成と世界への発信」

臺 美佐子

石川県立看護大学 看護学部 成人・老年看護学講座



第12回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会（ILFJ）学術集会開催にあたり、多くの方々にご指導・ご支援、温かな激励をいただきましたこと感謝申し上げます。

そして、ご参加登録いただきました皆様と共に、この学術集会で時間を共有できますことに心から喜びを感じております。

大会長講演では、臨床課題の解決を目指し挑戦してきた、ILFJの国際共同研究、多分野融合で行ってきた研究の概要をご紹介します。大学教員として研究と教育に携わり、看護師、リンパ浮腫療法士として臨床を継続する中で、様々な臨床課題を見出してまいりました。そして、その臨床課題を解決したいというリサーチマインドを軸に研究を継続し、世界に発信してまいりました。これまでの研究成果は、浮腫管理の質向上を目指すにあたり、まだまだ小さな一歩ではあるものの、重要な軌跡でありました。これからは、エビデンスのさらなる蓄積と実装が求められます。私の夢は、浮腫を有する方々にとって、安心、安全、快適に暮らすことができる社会を構築することです。多様な領域のトップランナーである研究者、臨床のスペシャリスト、そして次世代を担う若手の人材とともに、一歩ずつ前進していきたいと考えています。本講演を通し、現地、オンライン、オンデマンドいずれでも、皆様に浮腫の臨床課題と取り組みを知っていただき、未来の夢を共有できると幸いです。

略歴

石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座教授。藤田医科大学 客員教授。

2005年群馬大学医学部保健学科看護学専攻卒業後、慶應義塾大学病院勤務（看護師）、2010年金沢大学大学院医学系研究科博士前期課程修了、2014年金沢大学大学院医学系研究科博士後期課程修了し博士（保健学）取得。金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域助教（2010-2019年）、東京大学大学院医学系研究科社会連携講座スキンケアサイエンス特任講師（2019-2021年）、藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター准教授（2021-2023年）を経て、石川県立看護大学看護学部 教授に着任（2023-現在に至る）。

2010年より国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会事務局を務め、2022年より同理事に就任。日本リンパ浮腫治療学会評議員、日本創傷オストミー・失禁管理学会評議員、看護理工学会評議員を務める。

リンパ浮腫に関する研究を継続して実施し、国際共同研究、産学連携、多分野共同での研究成果の論文発表、国内外での講演、国内外での受賞歴を有する。

「Validation of LYMPHOQOL: quality of life in children and young people living with lymphoedema」

Christine Moffatt

International Clinical Nursing at Nottingham Trent University,
the University of Nottingham, UK.



Background

Lymphoedema in children is considered a rare disease and is associated with a wide spectrum of Lymphatic anomalies. The development of disease specific quality of life tools for this condition have not been developed until now. Over the last 15 years the International Lymphoedema Framework (ILF) have undertaken qualitative research that has highlighted the impact of this condition on both the child and families. Findings from this qualitative work led to the creation of the first version of quality-of-life tools for young children and adolescents which were shared through focus groups with young patients and families during an international lymphoedema therapeutic camp held in Turin, Italy in 2017. Adaptions to the initial questionnaires were made following content analysis of the transcriptions of the research and the initial content validity and face validity of the second version of the tools were undertaken with parents and professionals from France, UK and Italy.

Methods

The primary objective of the study was to validate two disease specific quality of life tools for children and young people living with Lymphoedema using a factor analysis with a varimax rotation and correlations with generic quality of life tools designed for children with many different forms of chronic illness (Kidscreen 10 and 27). Permission was sought to use Kidscreen 10 and 27 in this research.

Secondary objectives of the study included translation and validation of the tools in multiple languages and to develop an integrated approach that would improve assessment and treatment of children and objective methods of assessment.

Assuming a homogenous population a sample size of > 267 was required to ensure sufficient power to validate the questionnaires. Ethical approval for the study was obtained through Nottingham University Ethics committee.

The questionnaires were developed for use on survey monkey and all parents and young people had to provide written informed consent for inclusion and had to have had a professional diagnosis of Lymphoedema. The domains included the following: experience at school/college/work, physical activity, use of free time, treatment considerations, treatment and self-management challenges and a score of overall quality of life. The young child questionnaire was given to children aged 5 to 12 years and used emoticons within a 3-point Likert scale and the adolescent scale adopted a 5-point Likert scale and recruited young people aged 13 to 21.

The primary questionnaires were developed in English and language translations followed international guidance for linguistic translation with both a forward and back translation and access to an independent native speaker for any difficulties that could not be resolved in each language,

A comprehensive distribution method of dissemination was developed by ILF that included use of social media and dissemination to specialist services in each framework country and a wider dissemination to specialists working with children and Lymphoedema worldwide.

Results

Six hundred children and young people provided socio-demographic and clinical data but did not complete both QOL tools and were excluded from the main analysis. Patients were recruited from 25 countries with the highest rates of recruitment in France (118 / 24.63%), UK (91/19.00%) and Turkey (95/19.83%).

QOL - Total group (5 to 21)

In total there were 487 complete QOL responses of whom 318 (65.57%) were female and 167 (34.43%) were male. Two people did not give their gender. There was a good spread of ages from 5 to 21 years with a mean (s.d.) of 14.30 (5.0) years. Patients developed swelling from birth to 21 years. Of these 180/481 (37.4%) were under the age of one, with a mean (s.d.) age when swelling started of 6.1 (6.2) years. In total a specialist diagnosed their condition in 438/457 (95.8%). Patients received a diagnosis between birth and 21 years. Of these 180/481 (37.4%) were under the age of one with a mean (s.d.) age at diagnosis of 7.64 (6.40) years. The majority had a time lag <1 year (56.8%) with 80.6% being diagnosed within three years of developing the swelling. However, there were 23/470 (4.9%) who remained undiagnosed more than 10 years from the swelling development. A total of 147/456 (32.23%) had experienced at least one episode of cellulitis. Most common areas of swelling were legs 452/487 (95.58%) and arms 83/487 (17.0%), torso swelling occurred in 45/487 (9.2%). In total 31/487 (6.4%) had swelling of their sex organs and 28 (5.7%) had swelling of their head or neck.

A 5, 4 and 3 factor structure were examined and a 3- factor structure was found to fit the data best. Only Eigen factors of > 1 were included in the final analysis and individual questions that had > 70% floor or ceiling effect were excluded. In the child questionnaire the following factors were found; Factor 1- daily life, school and family (EF 9.75), Factor 2- Emotions (EF 2.67) and Factor 3- care of your lymphoedema (EF 2.61). Good correlation between the LYMPHOQOL factors and Kidscreen10 were found with factor 3 being most closely correlated with KS10 (0.540).

Eigen values for the adolescent questionnaire were ; Factor - 1 Emotion (EF 11.89), Factor 2 - Impact on activities (EF 2.34) and Factor 3 - Caring for your lymphoedema (EF 2.23). Correlations between LYMPHOQOL and Kidscreen-27 domains were highest for emotion (0.63) but also for impact on activities (0.60) and caring for your Lymphoedema (0.48).

Conclusion

The analysis so far has shown a clear factorial structure of both tools with only a limited ceiling and floor effect, The study has supported the need for age specific tools and that scoring systems that are too complex cannot be easily interpreted by younger children due to lack of their cognitive abilities. There is also good correlation with a generic quality of life tool that was also validated in

the different languages.

The linguistic translation process is both vital but also time consuming and requiring careful standardisation. Terms are not always easily translated into different cultures. The study benefits though from the availability of the questionnaires in 9 languages. At present further work is being undertaken to examine the stability of the tool in a test-retest study. Further studies are being planned to examine the correlation with changes in the clinical evolution and quality of life tool. Further tools will be developed in low resource countries where the issues faced by children and families will be very different.

I would like to express my thanks for the many patients, families and professionals who have made this work possible and in particular the ongoing support of ILFJAPAN for their active engagement in all the work of ILF. This work has received no financial support and is an example of what can be achieved through international partnerships.

略歴

Professor Christine Moffatt CBE, FRCN PhD MA RGN DN is Professor of International Clinical Nursing at Nottingham Trent University, UK, and Emeritus Professor at the University of Nottingham, UK.

She is also a nurse consultant at Copenhagen Wound Healing Centre, Denmark and a nurse consultant at the Royal Derby Foundation NHS Trust Lymphoedema service, where she leads a research team as well as undertaking a clinical consultancy role.

Christine is currently chairperson of the International Lymphoedema Framework. She has been involved in wound healing research and practice for 25 years and lymphoedema for 10 years. She has undertaken extensive research in this field using mixed research methods, including running national and international clinical trials.

Her areas of research include compression therapy, service development and evaluation, psychosocial impact of disease, chronic wounds and lymphoedema. She has presented and published internationally.

She was awarded a CBE in the 2006 New Year's Honours List and made a life fellow of the Royal College of Nursing that same year. She has received several lifetime achievement awards in recognition of her work, the most recent being presented by the World Union of Wound Healing Societies in June 2008. In December 2008, she received a Nursing Times Diamond 20 Award as one of the 20 most influential nurses in the last 60 years.

「ILF-COM Chronic oedema scoping review: preliminary insights」

Martina Sykorova

School of Health Sciences University of Nottingham United Kingdom



Introduction

Currently there no standard outcome measures for patients with chronic oedema. Researchers and clinicians are always advised to use validated tools, however, what to do when they are none or validation is poor. There is a need to develop and validate outcome measures for chronic oedema that would enable clinicians nationally and internationally to assess and evaluate the progress of chronic oedema/lymphoedema.

Aims of Study

The aim of this scoping review is to identify and summarise current outcome measures for patients with chronic oedema and lymphoedema. The review includes adult and children patients presenting with chronic oedema, primary and/or secondary lymphoedema. The review includes all types of outcome measures: subjective (such as quality of life) and objective (such as limb measurements).

Methods

For the purpose of this review, chronic oedema will be defined as ‘an umbrella term for soft tissue swelling that has been present for at least three months that is not relieved by elevation or diuretics’ and lymphoedema will be defined as ‘a chronic condition of localized fluid retention and tissue swelling caused by a compromised lymphatic system’.

A comprehensive search was conducted using the following databases: The Cochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL), MEDLINE (via PubMed), EMBASE, Web of Science Core Collection, CINAHL and Scopus.

Inclusion criteria:

Population: All patients (paediatric and adults), humans

Study design: All types of studies

Years: 2003 - 2018

Language: English

Condition: Chronic oedema and lymphoedema: primary and secondary (including significant risk factors such as venous insufficiency and vascular malformations)

Body parts: All body parts

Results

In total, 7949 studies were included for abstract screening. Of those, 4474 full texts were screened, and 1383 papers were included for analysis. Limb volume used as an outcome measure in 41.7% studies. Circumference used as an outcome measure in 31.1% studies. Quality of life used as an outcome measure in 21.3% studies. The most common method of calculating limb volume was from circumference. The review identified a wide range of methods of how to calculate limb volume from circumference.

Conclusions

There is a need for a standardised and internationally validated outcome measures for chronic oedema/lymphoedema that would support research and clinical practice.

略歷

Martina Sykorova Bc., Mgr., MA, MRes, PhD researcher, University of Nottingham, UK

Martina has a background in public health and has been researching chronic oedema and chronic wounds since 2014. Martina's current research is looking into the evaluation of a care pathway for patients with chronic oedema and wet legs treated in the community. Martina has joined the International Lymphoedema Framework as a trustee in 2019.

会長企画演題

「日本での生殖器リンパ浮腫の教育に関するニーズ： ILF Genital Oedema Project」

上田 映美

公立小松大学 保健医療学部看護学科



生殖器リンパ浮腫は、疫学的なデータやアセスメント方法、ケア方法に関する科学的根拠が乏しい現状が続いています。その理由は、生殖器に関することは、男女ともに文化的にも心理的にも医療者に相談しづらい問題であることが影響しています。生殖器リンパ浮腫は、患者に重度の障害をもたらし、管理も極めて困難な浮腫です。そのため、生殖器リンパ浮腫に携わる医療者は、適切な教育や講習を受ける必要があります。しかし、医療者が、どのような教育のニーズをもっているのかは明らかになっていませんでした。そこで、International Lymphoedema Framework (ILF) が、2019 年からプロジェクトを立ち上げ、国際共同研究を企画しました。本発表では、日本における生殖器リンパ浮腫の教育に関するニーズの結果を報告し、今後生殖器リンパ浮腫教育を日本でどのように行っていくとよいのかディスカッションします。

略歴

公立小松大学保健医療学部看護学科准教授。博士（保健学）、看護師、保健師。

2007 年金沢大学医学部保健学科看護学専攻卒業、2007 年－2011 年金沢大学附属病院消化器外科・肝胆膵移植外科で看護師として勤務、2013 年金沢大学大学院医学系研究科保健学（博士前期課程）修了、2016 年金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻（博士後期課程）修了。2018 年公立小松大学保健医療学部看護学科助教、2023 年より現職。

国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会と International Lymphoedema Framework が国際共同研究として進めた ILF Health Service Evaluation Dataset の開発に参加するなど、慢性浮腫の若手研究者として活動している。現在は、高齢者に発生する下腿慢性浮腫に対するケア方法の開発やその評価を中心に研究を進めている。

社会活動：

国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会優秀論文賞選考委員、国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会編集事務局、日本看護科学学会誌選考査読委員、看護実践学会査読委員、日本創傷・オストミー・失禁管理学会編集委員会査読委員。

「リンパ浮腫アウトカム調査 ILF-COM の日本調査報告」

今方 裕子¹⁾，臺 美佐子¹⁾，須釜 淳子²⁾

1) 石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座

2) 藤田医科大学保健衛生学部看護学科・藤田医科大学社会実装看護創成研究センター



リンパ浮腫管理の質向上に向けて、国内外で研究が進められてきた。これにより、ガイドライン、ベストプラクティスの発行や、浮腫改善効果が期待される新たな技術の提案がなされてきた。しかしながら、浮腫評価のアウトカム指標には、様々な手法があり標準化に至っていないことや、臨床で実践する医療従事者や・研究者らもどのアウトカムを使用すべきか議論を続けている段階である。そこで、International Lymphoedema Framework (ILF) は世界 14 カ国を対象としたリンパ浮腫アウトカム調査である ILF-Chronic Oedema Outcome Measure (ILF-COM) プロジェクトを構築し、ILFJ も日本での調査を行うべく参画した。本調査は、医療従事者への自記式質問紙調査の回答を得て解析された。本発表では、日本調査の報告をし、リンパ浮腫管理の質向上に向けた医療従事者への今後の教育への提案を述べたい。

略歴

石川県立看護大学成人・老年看護学講座講師。

博士（保健学）、看護師、保健師、がん看護専門看護師。

2008 年石川県立看護大学看護学部 看護学科 卒業、2008-201 年国立病院機構金沢医療センター消化器外科・消化器内科病棟で看護師として勤務。2013-2015 年石川県立看護大学大学院博士前期課程（がん看護 CNS コース）修了、2015 年がん看護専門看護師を取得しがん看護外来の開設に携わり、がん化学療法中の患者の皮膚障害をテーマに臨床活動および研究を行う。2018 年石川県立看護大学成人・老年看護学講座助教に就任。2019-202 年金沢大学大学院医薬保険学総合研究科保健学専攻で博士（保健学）を取得し、2023 年より現職。がん患者の化学療法による浮腫ケアの開発を研究テーマとし、薬物療法中の浮腫エコーアセスメント、ケアについて教育・普及活動に従事している。2023 年 4 月より国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会事務局を務めている。

会長企画演題

「小児リンパ浮腫患者用 QOL 評価尺度を用いた 若者の QOL 実態調査」

田崎 あゆみ¹⁾、間脇 彩奈²⁾、小柳 礼恵³⁾、
臺 美佐子⁴⁾、須釜 淳子²⁾

1) 藤田医科大学保健衛生学部看護学科, 2) 名古屋大学医学部保健学科, 3) 藤田医科大学保健衛生学部看護学科・藤田医科大学社会実装看護創成研究センター, 4) 石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座



小児期に発症するリンパ浮腫は、四肢をはじめとした全身の浮腫により、身体的・心理的・社会的な影響が生じることで、この時期に重要とされる発達課題達成が遅れ、小児の将来設計に大きく関与すると考える。したがって、小児リンパ浮腫患者の生活の質（QOL）を把握し、適切なリンパ浮腫管理を行うことが重要である。成人患者への QOL 評価尺度は普及しているが、発達段階が異なる小児を対象とした QOL 評価方法は国内外において未だない。

そこで、国際リンパ浮腫フレームワーク（International Lymphoedema Framework）が、国際的に使用可能な小児リンパ浮腫 QOL 評価方法を開発し、複数カ国でその翻訳版を作成して信頼性と妥当性の検証および QOL の実態を国際比較する研究プロジェクトを開始した。今回は、ILF が開発した小児リンパ浮腫患者用 QOL 評価尺度を日本語に翻訳し、6 事例に実施した。QOL 結果をレーダーチャートで示し、事例ごとに発症年齢、浮腫の部位、治療経過などとの関係を考察する。

略歴

職歴

1991～1999 年 名古屋第二赤十字病院

2001～2002 年 東京女子医科大学病院

2002～2016 年 あいち小児保健医療総合センター

2016 年～ 藤田医科大学保健衛生学部看護学科 小児看護学 准教授

学歴

1991 年 愛知県立総合看護専門学校 卒業

1997 年 佛教大学社会学部社会福祉学科 卒業

2001 年 山形大学大学院医学系研究科看護学専攻 修士課程 修了

2022 年 日本赤十字豊田看護大学大学院看護学研究科共同看護学専攻 博士課程 修了

資格

2004 年 小児看護専門看護師

2012 年 レシピエント移植コーディネーター

専門分野

臨床では、慢性疾患をもつ子どもの自立支援を中心に看護実践に取り組んできました。特に、慢性腎臓病をもつ子どもは、在宅でのケアが多いため家族に依存する傾向にあり、セルフケア獲得に影響を及ぼすことが課題となっています。そのため、大学では慢性腎臓病をもつ子どもの自立支援プログラム構築に関する研究に取り組んでいます。

「リンパ浮腫研究への国際共同研究の役割と戦略： LIMPRINT への参画経験から」

仲上 豪二郎

東京大学大学院 医学系研究科老年看護学／創傷看護学分野
東京大学大学院 医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンター
ケアイノベーション創生部門



リンパ浮腫に関する国際共同研究は、リンパ浮腫の管理方法や合併症のリスク要因の探求を通じて、多様な研究者間の知識共有を実現し、新たな管理法の開発を促進する。その成功には、多国間のコミュニケーション、緻密な方法論と共通理解が必要であるが、最も重要なことは、臨床課題に同意し、その解決に向けて、臨床の一人ひとりの情報を大切に取り扱い、活用することである。本講演は、国際リンパ浮腫フレームワーク（ILF）が主導し、本研究会も参画した「国際浮腫有病率調査 LIMPRINT」の全参加国の成果を概説し、臨床の1症例が蓄積されて世界への発信につながることを共有し、国際共同研究の推進方法と具体的な戦略について提案する。

略歴

2004年に神戸大学医学部保健学科卒業後、真田弘美先生に師事し、2009年に東京大学大学院医学系研究科博士後期課程修了（博士（保健学））。2007年から2009年まで日本学術振興会特別研究員。2009年東京大学大学院医学系研究科老年看護学／創傷看護学分野助教、2010年講師、2017年准教授を経て2022年より現職。グローバルナースングリサーチセンターケアイノベーション創生部門を兼任。2013年から2014年までカリフォルニア大学ロスアンゼルス校看護学部客員研究員。難治性創傷（褥瘡が主）を対象に、バイオマーカー探索、難治化メカニズム解明、ビッグデータ・人工知能、ロボティクス、AR応用に関する研究を実施している。2021年世界創傷治癒連合学会 Advances in Infection and Biofilm ゴールドプライズ、2017年東京大学医学部ベストティーチャーズアワード等受賞。本研究協議会理事、日本看護科学学会理事、日本創傷・オストミー・失禁管理学会理事他、関連学会で活動している。

「糖尿病足潰瘍予防の取り組み：国際共同研究の挑戦」

大江 真琴

金沢大学 医薬保健研究域保健学系



糖尿病足潰瘍は、QoL の低下、身体予後、生命予後に影響するため、予防が重要である。インドネシアの糖尿病患者数は世界で 7 番目に多く、合併症である糖尿病足潰瘍の予防対策の確立は喫緊の課題である。

2006 年に開設された大学病院の糖尿病足潰瘍の予防を目的とした外来で、リスクの同定からフットケアの実施、セルフケアに関する教育までのプロトコルを完成させた。その結果、当外来受診者の糖尿病足潰瘍の 1 年間の累積発症率は 0.2% に抑えることができた。

この過程で、経済産業省の事業に参加し、中国で当外来のサービスを提供する機会を得た。この経験から、インドネシアにこのプロトコルを導入することで、インドネシアにおいても糖尿病足潰瘍を予防できる可能性を考えた。そこで、まずは再発予防に焦点を当て、2019 年度に、足潰瘍の再発予防を目的としたランダム化比較試験を行った。本シンポジウムでは、これらの取り組みを紹介する。

略歴

1999 年に富山医科薬科大学にて学士（看護学）を取得し、富山医科薬科大学附属病院にて看護師として勤務した後、金沢大学大学院へ進学。2004 年に修士号（保健学）を取得し、横浜市立大学医学部看護学科の助手に着任。東京大学大学院博士後期課程へ入学し、博士（保健学）を取得した後、2010 年に東京大学に教員として着任。2020 年より、金沢大学医薬保健研究域保健学系教授。

専門分野は創傷看護学、看護理工学。研究課題は視覚化技術を用いた糖尿病足潰瘍予防外来の構築と実装、糖尿病足潰瘍治癒過程モニタリングスケール（DMIST）の開発。

「今日から使える医療統計～基本編～」

新谷 歩

大阪公立大学大学院医学研究科医療統計学教室



日々の日常臨床において、「この治療法は従来の方法よりより効果がある気がする、でもどうしたら、それを証明できるのか」と思っている人は多いと思います。現代医療は、エビデンスをもとにした医療 Evidence Based Medicine, EBM が推奨され、EBM はデータを集めることから始まります。そこで多くの方々は、日常臨床のデータはどうやって集めるのか？集めたデータをどう解析するのか？ソフトは何を使うのか？など様々な疑問が浮かぶことでしょう。本講演では T 検定やカイ二乗検定、分散分析など統計検定の選び方、無料統計ソフトの EZR（イージーアール）を用いたデータ集計の方法等を数式を用いずわかりやすく解説します。

略歴

大阪公立大学大学院医学研究科医療統計学教室 教授

大阪公立大学医学部附属病院臨床研究イノベーション推進センター臨床研究分野長

独立行政法人国立病院機構総合研究センター生物統計室長

東海大学 客員教授

日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第一病院 統計アドバイザー

Vanderbilt 大学 客員教授

厚生労働省 厚生科学審議会 臨床研究部会委員

厚生労働省 厚生科学審議会 患者申出療養評価会議 評価員

厚生労働省 中央社会保険医療協議会 費用対効果評価専門部会委員

2016 年 – 2021 年 大阪市立大学大学院医学研究科医療統計学教室 教授

2013 年 – 2016 年 大阪大学 大学院医学系研究科 臨床統計疫学寄附講座 教授

2007 年 – 2013 年 Vanderbilt 大学 医療統計学部 准教授

2001 年 – 2007 年 Vanderbilt 大学 医療統計学部 講師

2000 年 米国 Yale 大学博士課程修了

1996 年 米国 Yale 大学修士課程修了

2000 年に米国エール大学で生物統計学の博士号を取得後、テネシー州ヴァンダービルト大学で講師准教授を経て、2013 年より大阪大学医学部臨床統計疫学寄附講座教授。2016 年より現職。ヴァンダービルト在籍中は医師研究者の育成を目的とした臨床研究修士コースで 10 年以上 150 人に及ぶ医師サイエンティストの育成に携わる。著書に「今日から使える医療統計（医学書院）」「みんなの医療統計（講談社）」「臨床研究を応援します（羊土社）」がある。日本 REDCap コンソーシアム代表。2022 年 9 月にスタンフォード大学が発表した「世界で最も影響力のある研究者トップ 2%」に生涯区分・単年区分両方で選出された。

「エビデンスの創出と現場での実践をつなぐ実装研究」

島津 太一

国立がん研究センター がん対策研究所 行動科学研究部



介入研究によってケアのエビデンスが創出されてから日常の実践につながるには、17 年かかることが報告されている (Balas EA, Boren SA, 2000)。また、実践されたとしても、ケアが社会的、経済的、環境的に不利な状況に置かれている人々に届いていないという実装における格差も存在する。実装のギャップに対処するためには、患者、保健医療従事者、組織、地域などのステークホルダーと協働しながら、質的・量的手法、医療経済的手法などの専門家がチームを作り学際的なアプローチを総動員して取り組む必要がある。このような研究は以前から行われているが、米国、英国、カナダ、オーストラリアなどで実装研究としての「型」が共有され始めたのは、20 年ほど前からで、徐々にその重要性の認識は広まっている。ここでは、実装研究の基本的な考え方について紹介したい。今後の浮腫研究のロードマップづくりに役立てば幸いである。

略歴

2000 年に徳島大学医学部医学科を卒業し、佐賀医科大学総合診療部で初期臨床研修。2003 年東北大学大学院医学系研究科に入学し、公衆衛生学を専攻。2007 年より、国立がんセンターがん予防・検診研究センター予防研究部研究員。2013 年 6 月より、同室長。2020 年 4 月より行動科学研究部室長。2016-2017 年に海外研修制度にて米国 National Cancer Institute (米国国立がん研究所) に派遣。以後、研究の知見を、個人、組織の行動変容を通じて現場での実践につなげる実装科学に取り組む。専門は、実装科学、がんの疫学。保健医療福祉における普及と実装科学研究会 (D&I 科学研究会、RADISH) 世話人。健康格差是正のための実装科学ナショナルセンターコンソーシアム (N-EQUITY, National Center Consortium in Implementation Science for Health Equity) 運営事務局長。

「本邦初リンパ浮腫治療機器の開発状況」

北山 晋也

横浜市立大学 医学部形成外科



リンパ浮腫治療の gold standard は複合的圧迫療法である。リンパ流の改善を目指して外科的治療も追加されるが、特に下肢では根治は稀で基本的に恒久的な圧迫治療が必要となる。強圧の着衣を着用するのは大変な作業であり、時間的・身体的・経済的など様々な理由からリンパドレナージへの通院が困難な事もある。本邦は高齢化が著しくその傾向は今後も加速し、従来の圧迫治療が継続できないケースが増える事も予想される。国土や医療体制の異なる欧米では以前よりリンパ浮腫用の治療器が普及しており、種々の効果も報告されている。そのような背景から、誰でも、どこでも、いつでも使用できるリンパ浮腫用の圧迫治療機の必要性を感じ、我々は10年以上前から研究を行ってきた。2016年から株式会社テクノ高槻主体で共同研究開発が始まり、2020年からは岡山大学や千葉大学など他施設との協力関係を得て機器開発の状況は飛躍的に進行し、現在上市目前までこぎつけている。本公演では研究開発の経緯と現在地についてお話したい。

略歴

- 2005年 横浜市立大学医学部 卒業
- 2007年 横浜市立大学医学部形成外科入局
- 2012年 形成外科専門医取得
- 2013年 横浜市立大学医学部形成外科 助教
- 2016年 横浜労災病院形成外科 副部長
- 2018年 横浜市立大学医学部形成外科 診療講師
- 2021年 学位取得
- 2023年 横浜市立大学医学部形成外科 講師

「海外における間歇的空気圧迫装置（IPC）の活用状況について」

佐藤 佳代子

合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所



IPC は四肢に装着したスリーブに空気を送り込み、末梢側から中枢側に向かって周期的に拡張と収縮を繰り返し、静脈還流を促す器機である。おもに深部静脈血栓症の予防や浮腫治療に使用されている。海外の医療機関ではリンパ浮腫に対しても IPC が広く導入されているが、患肢や体幹における浮腫や皮膚病変を伴う合併症など個体差の大きいリンパ浮腫症状において、その有用性や安全性については議論の余地がある。長期的な IPC 施行による症状の維持および改善が期待されるなか、不適當な使用法により体肢中枢側および外性器浮腫の増強、皮下組織の硬化、指趾のうっ血などを引き起こす可能性も懸念される。このため医師の指示のもと個々の患者に対して使用方法を細やかに調節する必要がある。現在、本邦において初のリンパ浮腫治療に特化した医療機器が研究開発されているが、海外での IPC 活用状況を踏まえ、臨床現場や家庭において安全に導入されるための対策について学び得たい。

略歴

日々のリンパ浮腫治療を中心に、リンパ浮腫治療の普及 活動 、医療職セラピストおよび指導者の育成など幅広く取り組む。

1996 年 5 月 鍼灸あん 摩マッサージ指圧師 国家資格免許取得

2000 年 4 月 フェルディ式複合的理学療法 認定教師資格取得

2010 年 10 月 ドイツ連邦共和国 医療マッサージ師 国家資格取得

2018 年 12 月 合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所 設立

2022 年 12 月 国際リンパ浮腫フレームワーク ・ ジャパン研究協議会 理事

特別講演Ⅱ

「臨床と研究とのコラボレーションによる看護の未来」

眞野 恵子

藤田医科大学病院



臨床現場で働く看護師は、患者そして協働する多職種との関わりを通して、非常に多くの知見を得、実践に応用しています。これこそが、看護研究の目的である「知の創造や知見の活用」であり、看護の醍醐味です。多くの「経験知」があるにもかかわらず、臨床の中で現場の看護師だけで看護研究を創り上げるには難しい側面がありました。

2020 年 4 月、藤田医科大学社会実装看護創成研究センターが創設され、センターと病院とのコラボレーションが始まりました。研究素材の宝庫である臨床現場の「タネ」を咲かすためにエビデンスを創り上げる【介入】、そして研究で得られた研究成果を看護実践に取り入れる【実装】。このスパイラルが臨床と研究の乖離を埋め、win-win の関係として合理的な体制を構築することができました。それぞれの強みがつながったその先にある「看護の未来」について、一緒に考えてみませんか。

略歴

藤田医科大学病院 副院長 統括看護部長
認定看護管理者
2017 年 3 月 藤田保健衛生大学大学院修了
藤田保健衛生大学看護専門学校で 15 年間基礎教育に携わり
2002 年 4 月 藤田保健衛生大学病院
2011 年 10 月 同院 看護部長
2012 年 2 月 同院 副院長 兼務
2018 年 3 月 同大学 統括看護部長 兼務
2019 年 1 月 同大学 理事兼務 現在に至る
学術活動
2011 年 10 月～現在 日本意識障害学会理事
2016 年 11 月 第 12 回日本移植・再生医療看護学会学術集会 会長
2017 年 1 月 第 10 回日本性差医学・医療学会学術集会 副会長
2017 年 2 月 第 34 回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会 副会長
2017 年 8 月 第 15 回癒しの環境研究会愛知全国大会 名誉顧問
2017 年 10 月 第 13 回国際脳卒中外科学会副会長
2018 年 10 月～現在日本看護管理学会 評議員
2018 年 11 月～現在 日本移植・再生医療看護学会 理事 評議員 教育委員会

公職歴

2019 年 8 月 日本看護学教育学会第 31 回学術集会 企画委員
2019 年 10 月 日本看護技術学会第 19 回学術集会 副学術集会長
2021 年 4 月～2026 年 3 月 日本意識障害学会 認定サポート指導士
2012 年 4 月～2016 年 3 月 愛知県看護協会 看護職の WLB 推進委員会委員
2012 年 4 月～2014 年 6 月 同協会 推薦委員会委員長
2016 年 6 月～2022 年 6 月 愛知県看護協会 理事（副会長）
2016 年 10 月～2022 年 6 月 愛知県社会福祉協議会 運営適正化委員会委員
2017 年 4 月～2022 年 6 月 愛知県看護協会 新会館建設準備委員会委員
2018 年 4 月～2019 年 3 月 日本看護協会 看護労働委員会委員
2019 年 2 月～2019 年 3 月 あいち小児保健医療総合センター 経営改善プロジェクトチーム外部委員
2019 年 4 月～2020 年 3 月 日本看護協会 ナースセンターの将来構想に関する検討委員会委員
2022 年 4 月～2023 年 3 月 日本看護協会 看護労働委員会

「小児リンパ浮腫に対する複合的理学療法の実際」

佐藤 佳代子

合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所



原発性リンパ浮腫はリンパ管系の先天性形成不全や機能不全などに起因し、Kinmonth 氏による発症時期の分類において、先天性(1 歳未満)、早発性(1～35 歳)、遅発性(36 歳以上)の 3 型に分類される。小児リンパ浮腫は発症時期や浮腫の程度の個別性が高く、病因や遺伝子の関与についても多様であるため、個々の子どもの成長に合わせてケア内容や刺激量を調整しながら進めていくことが大切である。当施設では親御さんも共にリンパ浮腫の病態や合併症について理解を深め、お子さまへの具体的なケア方法、日々の管理などのスキルを学んでいただく。

このたびの教育講演では、出生時から思春期までの小児に対する保存的リンパ浮腫治療(複合的理学療法)における取り組みについて紹介したい。今現在必要とされる治療とケアに重きを置きながらも、思春期や青年期のころとからだの発達に寄り添い、ご家族のすぐ傍でお子さまの成長のサポートができるように心から願っている。

略歴

日々のリンパ浮腫治療を中心に、リンパ浮腫治療の普及 活動 、医療職セラピストおよび指導者の育成など幅広く取り組む。

1996 年 5 月 鍼灸あん 摩マッサージ指圧師 国家資格免許取得

2000 年 4 月 フェルディ式複合的理学療法 認定教師資格取得

2010 年 10 月 ドイツ連邦共和国 医療マッサージ師 国家資格取得

2018 年 12 月 合同会社のあ さとうリンパ浮腫研究所 設立

2022 年 12 月 国際リンパ浮腫フレームワーク ・ジャパン研究協議会 理事

スイーツセミナー

「バーチャルホスピタルを目指した病院と在宅の 看看連携アプリ」

岡田 正規

ディピューラメディカルソリューションズ株式会社



医療費の増大や少子高齢化、人口減少など社会構造が急変する中で、地域の中核病院を中心とした地域医療はその質を高めながら同時に効率化・省力化を進めることが喫緊の課題である。ディピューラメディカルソリューションズは、新しい地域医療の担い手として病院看護師、訪問看護師の果たす役割の大きさと期待の高さを鑑み、両者が有機的に連携することでさらなる発展が期待できると考え、看護師同士の直接的な業務連携を支援するソフトウェアアプリケーションの開発・提供している。本発表ではその概要を紹介するとともに、リンパ浮腫患者の遠隔ケア領域への応用可能性と期待について報告したい。

略歴

- 2002 年 シスメックス株式会社 入社 中央研究所配属
- 2011 年 ヘマトロジーエンジニアリング本部 商品開発担当
- 2015 年 ヘマトロジーエンジニアリング本部 事業企画担当
- 2017 年 クリニカルイノベーション本部 商品企画担当
- 2020 年 ディピューラメディカルソリューションズ株式会社 出向 事業企画担当
- 2021 年 ディピューラメディカルソリューションズ株式会社 代表取締役社長就任

「リンパ浮腫ケアの在宅医療と遠隔化 ～現状と今後の展望～」

小川 佳宏

医療法人 リムズ徳島クリニック



複合的治療は、リンパ浮腫治療で最も基本となる保存的治療であり、「リンパ浮腫複合的治療料」が保険収載されて以降、リンパ浮腫患者を診療する医療機関は全国的に増加している。しかしケアの内容に地域差が大きいのが実際である。また患者の高齢化で在宅医療が必要となっても、在宅でケアできる訪問看護ステーションは稀である。以前から徳島県では、がん診療連携協議会が「リンパ浮腫基礎研修会」を開催し、リンパ浮腫に関する基礎講義とともに、用手的リンパドレナージや弾性包帯による圧迫療法について実技指導を行ってきた。現在受講者の一部は訪問看護でリンパ浮腫治療に携わっており、当院から在宅でのケアを目的に紹介する患者もある。ただ重症で当院に受診できない患者や、蜂窩織炎など症状に急変があった患者は、現時点では当院で対処することは難しい。今後はリンパ浮腫診療になれた医療者が遠隔診療してケアの方法を助言できる体制の構築が望まれる。

略歴

- 平成元年 3 月 徳島大学医学部医学科卒業
- 平成元年 5 月 徳島大学医学部附属病院心臓血管外科医員
- 平成 2 年 4 月 阿南医師会中央病院（現阿南医療センター）外科医員
- 平成 3 年 4 月 小松島赤十字病院（現徳島赤十字病院）循環器科医員
- 平成 4 年 4 月 土佐市民病院外科医員
- 平成 8 年 4 月 徳島大学医学部附属病院心臓血管外科医員 リンパ浮腫診療に専門的に携わる。
- 平成 10 年 4 月 斎藤病院勤務 リンパ浮腫患者に対する教育入院という形式での診療を始める。
- 平成 12 年 9 月 リムズ徳島クリニック開業 現在にいたる

【所属学会】

日本静脈学会（評議員）、日本リンパ学会（理事）、日本脈管学会（評議員）、日本リンパ浮腫学会（評議員）、日本リンパ浮腫治療学会（理事長）、日本がんサポーターズケア学会（評議員）

【専門分野】

心臓血管外科、末梢血管外科、リンパ浮腫

【現在の活動】

- ・日本医療リンパドレナージ協会 副理事長
- ・がんのリハビリテーション リンパ浮腫研修委員会 委員
- ・弾性ストッキングコンダクター養成委員会 委員
- ・日本がんサポーターズケア学会 リンパ浮腫部会 副部会長

「リンパ浮腫患者に対する遠隔保存療法指導の試み」



松本 智里¹⁾，臺 美佐子¹⁾

1) 石川県立看護大学 看護学部 成人・老年看護学講座

リンパ浮腫管理の中で保存療法は標準的治療方法であり、患者がセルフケアを導入・継続できるよう指導することが重要である。従来、リンパ浮腫患者への保存療法は、リンパ浮腫管理に精通した医療従事者が外来や病棟で対面にて指導する。しかし、地域や施設によるリンパ浮腫専門家の偏在により、リンパ浮腫管理の質の格差が生じている現状がある。この解決に向けて、我々は遠隔でのリンパ浮腫保存療法指導を考案した。これは、国内外のリンパ浮腫管理の質の均霑化を目指す第1歩であり、遠隔ケア体制構築を目指し取り組み始めている。本発表では、我々が取り組み始めたリンパ浮腫保存療法の遠隔ケアの症例を紹介する。

略歴

現職：石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 成人看護学 准教授

2005 年 金沢大学医学部保健学科看護学専攻卒業

2007 年 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了

2007 年 金沢大学附属病院整形外科病棟で看護師として勤務

2013 年 金沢医科大学看護学部 非常勤講師

2014 年 石川県立看護大学 成人・老年看護学講座 成人看護学 助教に着任

2019 年 同大学 講師

2022 年 現職に至る

日本運動器看護学会 研究プロジェクト委員

日本がん看護学会 査読委員

看護実践学会 査読委員

ワークショップ

「エコーアセスメントとリンパドレナージ体験」

進行：紺家千津子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 教授）

今方 裕子（石川県立看護大学看護学部 成人・老年看護学講座 講師）

講師：

エコーアセスメント体験

藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 講師

三浦 由佳



石川県立看護大学 看護学部 成人・老年看護学講座 准教授

松本 勝



リンパドレナージ体験

おおたブレストクリニック リンパドレナージセラピスト

荒井よう子



石川県済生会金沢病院 リンパドレナージセラピスト

高地 弥里



第12回国際リンパ浮腫フレームワークジャパン研究協議会学術集会の現地参加特別企画として、ワークショップを開催します。

リンパ浮腫のアセスメントとケアについて、臨床での実践方法に困った経験はありませんか？浮腫管理の質向上に向けて、基本的な実践技術を医療者に普及することが重要です。今回、その一助となることを目指し、アセスメントとしてエコー、ケアとしてリンパドレナージを体験できる機会を設けました。

エコーアセスメントでは、ワイヤレスの小型エコーを用いて、基本的な操作方法から皮膚と皮下組織の評価方法まで体験していただけます。リンパドレナージ体験では、リンパドレナージセラピストが基本技術を伝授します。このワークショップが皆さんにとって一歩踏み出し明日からの浮腫ケアを変える、そんなきっかけになれば幸いです。

一般演題 I：浮腫の診断と治療

I-1

加齢による下肢浮腫とリンパ管の機能低下の検討

吉田 周平¹⁾, 今井 洋文¹⁾, 目瀬 藤四郎¹⁾, 光嶋 勲¹⁾

1) 広島大学形成外科リンパ浮腫センター

【目的】加齢で足がむくむという訴えに日常診療で頻繁に遭遇するが詳細な研究は少ない。本研究の目的は壮年期以降に発症する下肢浮腫に対するリンパ管の影響を調査することにある。

【方法】対象は55名109肢の65歳以降発症の原発性下肢浮腫であった。リンパシンチでtransit timeとICG局注後翌日のICG像を観察した。リンパ管静脈吻合を行った症例では術中のリンパ管所見を記録し2次性下肢リンパ浮腫症例と検討した。

【成績】Transit timeは全例延長し、ICG造影所見はlinear群、low enhancement(LE)群、dDB群、eDB群に分類できた。リンパ管外径は有意に拡張していた。

【結論】加齢による原発性下肢浮腫では大腿部に限定する浮腫症例がなく末梢から増悪する傾向が推測された。リンパシンチのtransit time遅延はリンパ管の収縮力減衰があることを推測させた。

I-2

四肢リンパ浮腫における脂肪吸引術の上肢と下肢での違い

吉田 周平¹⁾, 今井 洋文¹⁾, 目瀬 藤四郎¹⁾, 光嶋 勲¹⁾

1) 広島大学形成外科リンパ浮腫センター

【目的】リンパ浮腫の脂肪吸引術は上肢下肢ともに行われるが上肢と下肢での効果や術後管理の違いについて検討した。

【方法】術後予定していた加圧療法が完遂できたかどうかで両軍をそれぞれ完遂群と未遂群に細分した。群間で改善度の違いや要した加圧の違いを検討した。

【結果】28例の片側四肢リンパ浮腫が対象となった(下肢完遂群, n=12; 下肢未遂群, n=6; 上肢完遂群, n=10; 上肢未遂群, n=0)。下肢で未遂群の発生が有意に多く($p=0.04$)、上肢での術後減量比が有意に高かった($p=0.03$)。しかし完遂群同士での比較では上肢下肢ともに減少率に差はなかった($p=0.32$)。

【結論】四肢リンパ浮腫における脂肪吸引術は上肢がより効果的であるが術後加圧が継続させやすいことが原因であると考えられた。

一般演題 I：浮腫の診断と治療

I-3

解剖学的リンパ流を考慮したリンパ再建術

山下 修二¹⁾, Roh Solji¹⁾, 新井 理恵¹⁾,
木村 知巳¹⁾

1) 川崎医科大学形成外科

【目的】体表面のリンパ流は所属するリンパ節へ収束するため、下肢のリンパ液が分水嶺を超えて腋窩リンパ節へ流れることはない。しかし、リンパの流れを持った皮弁について分水嶺を超えて再配置することで新たなリンパ循環の再建することができる。本報告では、リンパ移行術による新たなリンパ再建について詳述する。

【方法】2次性下肢リンパ浮腫26例31肢に対し、逆行性の SCIP flap によるリンパ移行術を行った。術後評価は、ICG の皮弁内投与後の腋窩へ向う側副路形成の有無と周径変化により行った。

【結果】腋窩リンパ節へ向かう側副路は、28 肢中 21 肢 (75%) に認められた。

【考察】今回、我々が行ったリンパ移行術は、鼠径リンパ節へ向かうリンパ管を含んだ皮弁の配置を変えることでリンパ流のベクトルを変え、分水嶺を超えることで腋窩リンパ節へ流れるバイパスを造る手技であり、リンパ循環が改善されることが期待される。

I-4

陰部リンパ漏関連性蜂窩織炎の外科的管理

山下 修二¹⁾, Roh Solji¹⁾, 新井 理恵¹⁾,
木村 知巳¹⁾

1) 川崎医科大学形成外科

【目的】蜂窩織炎を頻発する下肢リンパ浮腫に合併した陰部リンパ漏について報告する。

【方法・結果】対象は、陰部リンパ漏を伴う蜂窩織炎を頻発に繰り返す下肢リンパ浮腫 16 例 (平均年齢 49.1 歳、女性 9 例、男性 7 例)。陰部のリンパ瘻を伴う病変部を切除し、女性は臀溝皮弁で男性は SCIP flap でそれぞれ再建した。術前後 1 年間の蜂窩織炎の発生頻度を比較検討した。蜂窩織炎の平均発生頻度は、6.0 回/年から 0.4 回/年に減少した。16 例中 2 例 (12.5%) でリンパ漏の局所再発を認めた。

【考察】リンパ循環を改善することで蜂窩織炎の頻度が減少することは既にコンセンサスが得られているが、リンパ浮腫の終末像である陰部リンパ漏をともしなう蜂窩織炎の管理は難渋することが多く、flap による再建を前提にすることで病変部の十分な切除を行うことができ蜂窩織炎の発生を抑制することができるものと考えている。

一般演題 I：浮腫の診断と治療

I-5

リンパ浮腫に伴う蜂窩織炎の臨床経過とその
治療；特に反復する蜂窩織炎への対応に関して

Roh Solji¹⁾, 山下 修二¹⁾

1) 川崎医科大学形成外科

【目的】四肢のリンパ浮腫では局所的な免疫低下が示唆されており、反復性の蜂窩織炎を併発し、重症化しやすいことが知られている。しかし、その臨床的特徴や対応方法などの報告は少なく、治療エビデンスも確立されていない。今回、我々が経験したリンパ浮腫に続発する蜂窩織炎の詳細について報告する。

【方法】リンパ浮腫に合併した蜂窩織炎に対して入院治療を行った 42 症例を後方視的に検討した。

【結果】臨床症状として、ほぼ全例で患肢の発赤・腫脹、発熱を認めており、顕著な CRP 増加と Alb 低下を認めた。平均入院日数は 7.3 日で、肥満やリンパ浮腫発症期間は有意なリスク因子であった。

【考察】反復する蜂窩織炎により、リンパ管の変性と皮下組織の繊維化が進行し、リンパ浮腫そのものが難治化するリスクがある。今後は本結果を踏まえ適切な予防と治療プロトコルを検討する必要があると思われる。

一般演題Ⅱ：浮腫の評価とケア

Ⅱ-1

高齢者福祉事業に携わる職員が抱える 下肢浮腫に対する圧迫ケアの問題点

上田 映美¹⁾，大森 茉奈¹⁾，河越 美優¹⁾，
下東 夕真¹⁾，中野 美咲¹⁾，野本 千絢¹⁾，
村野 太一¹⁾，松井 優子¹⁾

1) 公立小松大学保健医療学部看護学科

【目的】高齢者福祉事業所の職員が、高齢者に対して圧迫ケアをする上で抱えている問題点を明らかにすることを目的とした。

【方法】研究デザインは横断研究で、対象者は高齢者福祉事業を展開する 458 事業所の職員（1 施設 1 名）とし、対象者に電話面接を行った。

【結果】207 名から回答があった。下肢浮腫をもつ高齢者がいる事業所は 88.9%だったが、このうち圧迫を実施している事業所は 40.2%であった。圧迫しない理由は「圧迫実施によるトラブル発生回避」「入所者からの要望がない」「技術面の不安」であった。弾性ストッキングの使用の際に感じる不満は、「つま先からかかとの部分を履かせることが大変」が最も多かった。

【考察・結論】高齢者福祉事業所において圧迫ケアを実施するためには、着脱しやすい商品の開発、下肢浮腫のケアに関する教育が必要であることが明らかとなった。

Ⅱ-2

リンパ浮腫患者に対する夏用弾性ストッキングの着心地改善に向けた改良とファッションデザイン性の向上

村山 祐子¹⁾，臺 美佐子²⁾

1) 金沢工業大学情報フロンティア学部メディア情報学科，

2) 石川県立看護大学成人・老年看護学講座

リンパ浮腫患者に対する弾性ストッキングによる圧迫療法は、浮腫軽減に有効である一方、夏季には約 70%が暑さにより装着の困難感を感じている。そこで我々は、接触冷感性機能を付与した夏用弾性ストッキングを開発し、装着時、リンパ浮腫患者に冷たさを感じさせることに成功した。しかしながら、弾性ストッキングの着心地が悪いという課題が生じた。これは、涼感加工により、生地伸びが約 3.5 倍悪くなったことが要因と考えられる。この解決のため、涼感加工をなくし、生地製作の繊維配合割合を変更し改良を試みた。この結果、新たな生地の接触冷感性機能は工学試験上、維持されていることを確認した。さらに、ファッションデザイン性を向上させ、健康成人を対象として着心地に影響する要因が生じないことを明らかとした。以上より、改良生地とファッションデザイン性向上の夏用弾性ストッキングが、着心地への課題解決の一助となることが示唆された。

一般演題Ⅱ：浮腫の評価とケア

Ⅱ-3

日本語版上肢 Quality of Life Measurement for Limb Lymphedema 信頼性と妥当性

キム チュウアイ¹⁾、臺 美佐子²⁾、清水 三紀子¹⁾、
大高 洋平³⁾、尾関 恩⁴⁾、小山 総市朗⁵⁾、
大河内 由紀⁵⁾、中野 有子⁵⁾、鈴木 真歩⁵⁾、
宇佐美 瑞希⁵⁾

1) 藤田医科大学保健衛生学部看護学科、2) 石川県立看護大学成人・老年看護学講座、3) 藤田医科大学医学部リハビリテーション医学Ⅰ、4) 藤田医科大学保健衛生学部リハビリテーション学科、5) 藤田医科大学病院リハビリテーション部

【目的】リンパ浮腫患者の生活の質を正確に評価することは適時に患者の治療とケアを行うために重要である。そこで、本研究は下肢において信頼性と妥当性が確立している日本語版 LYMQOL-Arm の信頼性と妥当性を検証した。

【方法】乳がんの治療歴があつて上肢リンパ浮腫と診断された者に対し、2 回の自記式質問紙にてデータ収集を行った。調査項目は対象者の基本属性、リンパ浮腫の状態などと、LYMQOL-Arm、日本語版 EORTC-QLQ-C30 であった。研究者所属施設倫理審査委員会にて承認を得て実施した。

【結果】本研究の対象者 11 名の平均年齢は 55 歳で、リンパ浮腫の病期分類はⅡ期が 7 名 (63.6%) であった。再テスト法では $r=0.786$ 、併存妥当性は $r=0.308$ であった。

【結論】LYMQOL-Arm の高い信頼性が示されたが、妥当性が十分とは言えない。今後、症例数を増して検証する必要がある。

Ⅱ-4

経静脈的抗がん剤投与直後の注射部位局所の皮下浮腫および血栓と再来日に生じる硬結の関連：血管温存の視点から

阿部 麻里¹⁾、村山 陵子²⁾、仲上 豪二郎¹⁾、
真田 弘美³⁾

1) 東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻老年看護学/創傷看護学分野、2) 藤田医科大学保健衛生学部看護学科、3) 石川県立看護大学

【目的】末梢静脈からの抗がん剤投与には血管の温存が重要である。顕性の血管外漏出が認められない場合でも注射部位に皮下浮腫や血栓などの不顕性炎症が生じ、のちに硬結（軟部組織の病的な硬化）が発生することがある。本研究の目的は、血管温存ケア開発のため、治療直後の注射部位局所の変化と硬結の関連を探索することである。

【方法】抗がん剤投与部位の皮膚温度の変化を観察した前向きコホート研究 (PMID: 32942231) の二次解析。対象者 31 名。抗がん剤投与直後の皮下の異常所見（浮腫、血栓、血管壁の肥厚）について硬結発生をイベントとし、 Kaplan-Meier 法を用いて分析し、ログランク検定を実施した。

【結果】再来日の硬結発生において、治療直後の皮下浮腫と血栓は有意な差があつた（浮腫: $p=0.021$, 血栓: $p=0.002$ ）。

【結論】治療直後の皮下浮腫や血栓を防ぐことが硬結発生予防まで含めた血管温存ケアとなる。

一般演題Ⅱ：浮腫の評価とケア

Ⅱ-5

看護ケア開発を目的としたドセタキセル誘因性浮腫モデルマウスの作製

間脇 彩奈^{1, 2)}, 中谷 寿男³⁾, 吉村 文⁴⁾,
臺 美佐子⁵⁾, 光田 益士⁶⁾, 長尾 静子⁴⁾,
須釜 淳子⁶⁾

1) 藤田医科大学大学院保健学研究科保健医療科学領域保健医療連携学分野, 2) 名古屋大学大学院医学系研究科総合保健学専攻看護科学, 3) 北陸学院大学健康科学部栄養学科, 4) 藤田医科大学病態モデル先端医学研究センター, 5) 石川県立看護大学看護学部成人・老年看護学講座, 6) 藤田医科大学社会実装看護創成研究センター

【目的】乳がん薬物療法のキードラッグであるドセタキセル (DTX) 誘因性の浮腫は難治性のリンパ浮腫に進行する恐れもあり早期対応が必要であるが、その発生機序に適した対応方法は明らかになっていない。本研究では、看護ケア開発を目的として DTX 誘因性浮腫モデルマウスの作製を試みた。

【方法】BALB/c 雄性マウスを DTX20 mg/kg群、DTX10 mg/kg群、生理食塩液 (NS) 群に分け、DTX もしくは NS を 7 日毎に計 4 回腹腔内に投与した。経過を体重、周径で肉眼的に評価し、4 回目の投与後には皮膚組織を採取し組織観察を行った。

【結果・考察】DXT20 mg/kg投与群では、他群と比較して食欲不振、体重減少、脱毛等の現象が観察され、薬剤による影響を受けていたことが推察された。しかし、いずれの群でも今回の観察からは明らかな浮腫を評価することはできなかった。今後、投与方法と浮腫評価方法について再度検討する必要がある。

一般演題Ⅲ：症例報告・実践報告

Ⅲ-1

外陰部・下腹部の病変に伴う浮腫に対する放射線療法中の看護援助の検討

水谷 洋¹⁾，臺 美佐子²⁾，神納 美保¹⁾，
佐野 克明¹⁾，須釜 淳子³⁾，眞野 恵子¹⁾

1) 藤田医科大学病院看護部，2) 石川県立看護大学成人・
老年看護学講座，3) 藤田医科大学研究推進本部社会実装看
護創成研究センター

【背景・目的】外陰部や下腹部の病変に伴い出現する浮腫は、浮腫の重篤化と日常生活への支障の大きさから生活の質の低下に直結する。今回、外陰部の潰瘍・下腹部の腫瘍性病変による浮腫と疼痛に対する放射線療法中の看護援助を検討したので報告する。

【症例】60歳代女性、外陰部有棘細胞癌。下腹部に結節、外陰部有棘細胞癌で陰部・肛門部に病変を認めた。ADL拡大と疼痛緩和を目的に、下腹部全体・陰部・肛門部へ前後対向二門照射の放射線療法を行った。疼痛により自力での体位変換が困難で、治療中の褥瘡・創傷の発生リスクがあることから、放射線療法の際に体圧分散ウレタンフォームで除圧を図った。また、滲出液が多量であり、スキンケアの工夫、臭気に対する環境整備を行うことで、放射線療法を可能にした。

【考察・結論】浮腫と疼痛に対して体圧管理・滲出液管理を実践することで、放射線療法の一助となったと考えられる。

Ⅲ-2

下肢リンパ浮腫に対する運動療法期間中の転倒と今後の対策

野田 早智恵¹⁾，臺 美佐子²⁾，安藤 洋介³⁾，
神納 美保¹⁾，河田 健司⁴⁾，須釜 淳子⁵⁾，
眞野 恵子¹⁾

1) 藤田医科大学病院看護部，2) 石川県立看護大学成人・
老年看護学講座，3) 藤田医科大学医学部薬物治療情報学，
4) 藤田医科大学臨床腫瘍科，5) 藤田医科大学研究推進本
部社会実装看護創成研究センター

【背景・目的】リンパ浮腫管理方法の一つに運動療法があるが、リンパ浮腫管理の専門でない施設において運動療法の具体的計画や指導方法立案が十分でない実情がある。今回、下肢リンパ浮腫患者が運動療法中に転倒した事例を通し今後の対策を検討した。

【症例】60歳代女性、胆道癌で外来通院中。化学療法期間中に両下肢全体のリンパ浮腫が顕著となり、利尿剤処方と運動療法が提案された。薬剤の特徴や身体状況から、杖を用いた積極的な歩行に取り組んでいたが、外来通院時に廊下で転倒した。浮腫による歩きにくさ、薬剤による排尿管理、化学療法による末梢神経障害や倦怠感といった要因の関連性を考慮した運動療法の整備や運動療法の検討を行った。

【考察・結論】転倒リスクのあるリンパ浮腫患者の運動療法には、浮腫・がん治療・薬剤・認知レベルなどによる身体状態を考慮し、安全で効果的な計画と体制が必要であることが示唆された。

一般演題Ⅲ：症例報告・実践報告

Ⅲ-3

全身浮腫が顕著ながん終末期患者への緩和ケアチームによる輸液管理と心理的援助:症例報告

宇野 みゆき¹⁾, 臺 美佐子²⁾, 神納 美保¹⁾,
須釜 淳子³⁾, 眞野 恵子¹⁾

1) 藤田医科大学病院看護部, 2) 石川県立看護大学成人・老年看護学講座, 3) 藤田医科大学研究推進本部社会実装看護創成研究センター

【背景・目的】がん終末期患者の生活の質維持には、医療専門職チームによる介入が重要である。今回、全身浮腫を有するがん終末期患者に対する体液管理と心理的援助により身体的・心理的症状が緩和した1症例を報告する。

【症例】60歳代男性、胃癌、腹膜播種。訪問診療での在宅中心静脈栄養後、全身浮腫が出現し、緩和ケア病棟へ入院となった。患者は「つらい、早く逝かせてほしい」と悲観的な発言を繰り返していた。緩和ケアチームで、利尿剤・オピオイド投与による体液管理と疼痛コントロールを図り、医療者と家族とで心理的援助を実践した。全身浮腫の悪化は見られず、疼痛と全身倦怠感が軽減した。また、患者から「生きて家に帰りたい」との発言が聞かれた。

【考察・結論】全身性浮腫を有する終末期がん患者に対して、緩和ケアチームによる体液管理と家族も含めた心理的援助が、疼痛・全身倦怠感の緩和と心理状態の改善につながることを示唆された。

Ⅲ-4

リンパ浮腫出現を危惧し標準治療を選択しなかった乳がん患者への意思決定支援

神納 美保¹⁾, 臺 美佐子²⁾, 安藤 洋介³⁾,
秋吉 麻紀⁴⁾, 野田 早智恵¹⁾, 宇野 みゆき¹⁾,
河村 愛¹⁾, 河田 健司⁵⁾, 須釜 淳子⁶⁾,
眞野 恵子¹⁾

1) 藤田医科大学病院看護部, 2) 石川県立看護大学成人・老年看護学講座, 3) 藤田医科大学医学部薬物治療情報学, 4) 藤田医科大学岡崎医療センター看護部, 5) 藤田医科大学医学部臨床腫瘍科, 6) 藤田医科大学研究推進本部社会実装看護創成研究センター

【背景・目的】がん治療後のリンパ浮腫発生率は依然30～50%と報告され、発症後は浮腫による心理社会的問題も多い現状にあり、がん治療の意思決定過程に影響する。今回、がん治療によるリンパ浮腫出現を危惧し標準治療を選択しなかった乳がん患者への意思決定支援を報告する。

【症例】40歳代女性、左乳癌リンパ節転移。治療として標準治療が推奨されたが、リンパ浮腫に伴う外見変化と就業継続困難を危惧し、乳房部分切除のみの治療を選択した。治療後4年間、再発リスクは有するものの患者は意思決定結果に否定的意見はなく現在に至っている。

【考察・結論】がん治療の意思決定に対し、医療者はがん根治・再発リスクの低さ・予後の良い方法、患者はリンパ浮腫発症の影響が少ない方法と、各々の優先順位が異なる症例であった。特にリンパ浮腫リスクを有する患者に対して価値観を認め、意思決定支援に関わることが重要である。

「しあわせな老いを生き、生ききる」

川島 和代

石川県立看護大学 看護学部 学部長・教授



みなさま、日本人は長生きできる時代になりましたね。ひとつふたつの病があっても、知恵を働かせて暮らすと100歳まで生きること夢ではない時代です。からだの衰えは隠しようありませんが、老いの先には自分の自由になる「時間」、やりたいことができる「時間」という贈り物があります。この長い「時間」を、だれとどこで、どのように過ごしましょうか。多忙だった自分には自由になる時間はひそかな憧れ、旅行や習い事、友人とのおしゃべり、家のリフォーム、できなかったことやりたいですね。

でも、だんだん退屈になってきました。今の生活を大事にしながらも異なる選択肢も準備しておきたいですね。その時になったら考えようと思いがち、でも、誰かの手助けを必要とする頃には、自分で考えることも意思を伝えるのも難しい、おっくうになる、このことは忘れないでいて下さいね。元気うちに自分のためにめいっぱい楽しみたい、でも一番しあわせを感じるのは誰かの役に立つということだと気が付きました。

さらに、年月が流れ、耳が聞こえにくい、細かいものが見えない、動きものろのろとし、てきぱきこなしていた日常の家事や仕事も面倒になってきました。わがままになり、失敗を指摘されるとついかなとなり、感情を抑えるのも難しく自分の変化に戸惑っています。

徐々に食欲も減り、からだも一回り小さくなってきました。頭でわかっていても言葉がうまく出てこない時もあります。転んであざをつくってしまいました。このような時期をどう過ごすか、だれも教えてはくれません。まわりからは、何も分からなくなってきたのでは、認知症かもと心無い言葉に傷つくこともあります。聴こえないふりして耐えるしかありません。

たとえ、外見は衰えても私の心の中にはかつての若々しい頃の思いが残っていること、そんな力を引き出してくれる人と出会いたいと願っています。思い切ってサービスを利用するのも悪くないかもしれません。自分の人生を生ききことは生易しくありませんが、私は私らしく生き、逝きたいと思います。そんな私の人生を最期まで尊重して下さい。それが望みなのです。

略歴

石川県立看護大学 学部長（教授）

金沢大学医療技術短期大学部卒業、看護師、大学病院での臨床を経て、特別養護老人ホームでの実習指導や教育・研究に従事、老人病院・老人保健施設の看護実践、看護管理に携わり臨床と教育機関を往還しながら高齢者の看護に取り組んできた。現在は、石川県立看護大学に勤務しながら、社会福祉法人清湖の杜 理事長も兼務、高齢者や障がい者の暮らしを支援している。人生最終段階の日々をどう生き、逝きかかへの支援をライフワークとする。2011年宮崎県立看護大学大学院博士後期課程修了 博士（看護学）

市民公開講座 演奏会

平尾 有衣（ピアノ）

千葉県船橋市出身。東京藝術大学ピアノ専攻、同大学院修士課程修了。ドイツにて度々研鑽を積む。

これまでに弘中幸子、東誠三、ヴォルフガング・マンツの各氏に師事。

全日本学生音楽コンクール東京大会第2位。日本演奏家コンクールグランプリ受賞。千葉県議会より表彰を受ける。ウィーン国立音楽大学セミナーコンクール第2位。

室内楽奏者としても精力的に活動し、多数のアーティストと共演。

2019年より「さながら聴いて味わう美術館のように、クラシック音楽を楽しんでいただく」ことをコンセプトとした公演「Piacharm Music Museum®」を定期的で開催している。公式ホームページは「ピアチャーム」で検索。後進の指導にも力を入れており音楽教室「music & School」主宰。



林 佳南子（バイオリン）

京都生まれ。都立芸術高校を経て、東京藝術大学卒業。

第11回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール高校生部門第1位。第13回同コンクール弦楽器の部大学生部門第1位。

サイトウ・キネン・フェスティバル小澤征爾音楽塾、シエナ夏季国際音楽アカデミー（イタリア）など、国内外の講習会や音楽祭に参加。ソロ・室内楽で自主公演も行う。

一般財団法人「100万人のクラシックライブ」主催のコンサートに多数出演。

これまでに小室由利恵、保井頌子、若林暢、澤和樹、野口千代光、小森谷巧の各氏に師事。

兵庫芸術文化センター管弦楽団コアメンバー、大阪フィルハーモニー交響楽団第1ヴァイオリン奏者、神奈川フィルハーモニー管弦楽団契約団員を経て、現在はフリーランスとして多方面で活動中。



林 辰則（トランペット）

武蔵野音楽大学、フランス国立リヨン音楽院(CNR de LYON) フランス国立リヨン高等音楽院修士(CNSM de LYON) 修了。トランペットを久保義一、アドルフ・ハーセス、アンドレ・ジャング、クリスチャン・レジェ、ティエリー・カンスの各氏に師事。室内楽を久保義一、イブリーズ・ジラルール、ミッシェル・ベッケ、ティエリー・カンスの各氏に師事。在仏中、ダルディリー音楽学校、ケイヨー・スュール・フォンテーヌ音楽学校各講師を勤める。

2009年リヨン、サンジョルジュ教会にてオルガンとリサイタル、千葉にてピアノとデュオリサイタルを行う。2010年オーケストラ・デ・オスピス・シヴィル・ド・リヨンとハイドンのトランペ

ットコンチェルトを3公演行ない、好評を博し、また、東京フィルハーモニー交響楽団とハイドンのトランペットコンチェルトを共演し好評を博す。2002年トランペット協会20周年記念コンクールC部門入選。第30回及び第33回日本管打楽器コンクール入選。これまでに、フランス国立リヨン管弦楽団、マルセイユ・オペラ座、数多くのオーケストラ、オペラ、オペレッタ、ミュージカルに客演。洗足学園音楽大学非常勤講師、ドルチェミュージックアカデミー講師、ズーラシアンブラスお友達プレーヤー。兵庫芸術文化センター管弦楽団、Osaka Shion Wind Orchestra を経て、現在神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席トランペット奏者。



【協賛企業一覧】

特別講演 I 共催

株式会社ベータ・プラス

ランチョンセミナー

株式会社テクノ高槻

スイーツセミナー

ディピュラメディカルソリューションズ株式会社

企業展示

株式会社 encyclo

ソルブ株式会社

株式会社テクノ高槻

ディピュラメディカルソリューションズ株式会社

株式会社ベータ・プラス

富士フイルムメディカル株式会社

九州メディカルサービス株式会社

三重化学工業株式会社

三優メディカル株式会社

広 告

アルケア株式会社

株式会社八神製作所

株式会社ウルトラシー

サラヤ株式会社

株式会社照林社

ディピュラメディカルソリューションズ株式会社

株式会社ベータ・プラス

持田ヘルスケア株式会社

バナー広告

株式会社ウルトラシー

サラヤ株式会社

株式会社ベータ・プラス

丸善雄松堂株式会社

株式会社横正機業場

〈2023 年 8 月 23 日現在、五十音順〉

学術集会の開催にあたりましては以上の企業様より多大なるご支援を賜りました。

謹んで御礼申し上げます。

第 12 回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会学術集会

大会長 臺 美佐子

つなぐ手あて、ひらくケア。

ALCARE

Remois

リモイス® シリーズ

Remois® Series

スキンケア用品
Skin Care Products

肌をみつめ、こころ潤す。

リモイスは、ダメージを受けやすい肌へ
バリア機能を支える「保清」「保湿」「保護」の
トータルケアを実現します。

肌を整えることで、看護におけるコミュニケーション、
患者さんの生き生きとした心、
ご家族の安心につながるように。
スキンケアを通じて、こころまで潤したい。
それがリモイスの願いです。



- リモイス® ラメラ保湿ミルク
- リモイス® me 保湿ローション
- リモイス® me 保湿フォーム

保湿



- リモイス® クレンジ
- リモイス® 泡クレンジ

保清

+ 保湿



- リモイス® バリア
- リモイス® コート
- リモイス® コートハンディー

保護

+ 保湿

商品の詳細はこちらをご参照ください。



<https://www.alcare.co.jp/medical/product/nursing/skincare/>

アルケア株式会社

東京都墨田区錦糸1-2-1 アルカセントラル19F 〒130-0013
TEL.03-5611-7800(代表) FAX.03-5611-7825

お問い合わせ：コールセンター

フリーダイヤル

0120-770-863

土・日・祝日を除く
午前9：00～午後5：00



すべての生活者に

WELL-BEING を DESIGN する

業務内容：商品企画 / 製品デザイン / プロトタイプング / ブランディング

実績：家庭用電化製品 / 生活用品 / 工業機械 / 医療・健康機器



製品デザイン

象印マホービン (株) お・べ・ん・と ポーチ
2012年 発売 (継続販売商品)
Photo © Zojirushi corporation

製品・パッケージデザイン

セクスイ ランドリースタンド STIK-20 / 30

製品・リーフレットデザイン

(株) ベーテルプラス 弾性ストッキング
2019 グッドデザイン賞
2020 IAUD 国際デザイン賞 銅賞



ultrasi.co.jp

ultrasi

株式会社ウルトラシー



Batel Plus Corporation
株式会社 ベーテル・プラス

スキンケア 圧迫療法 創傷 ストーマ 排泄ケア

皮膚を水分・汚れ・刺激から守る

新発売



化粧品 150g

コラージュフルフル はっすい 撥水保護 クリーム



・コラージュフルフル撥水保護クリームには抗真菌成分ミコナゾール硝酸塩を配合していません

浸軟しやすい
(ふやけやすい) 部分の
撥水保護クリームとして

おむつ使用時の
撥水保護クリーム
として

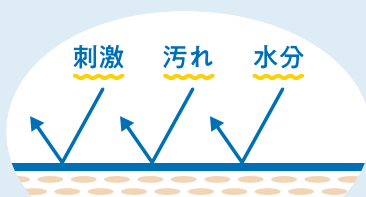
日常的な
保湿クリームとして

水分・汚れ・刺激から守り、肌を保湿

撥水保護
(はじく)

伸ばし
やすい

保湿
(うるおい)



セラミド※1

ヒアルロン酸※2

グリセリン※3 ベタイン※4

※1 アミノセラミド:ラウロイルグルタミン酸ジ(オクチルドデシルノフィトステリルノベヘニル)(油性成分)
※2 ヒアルロン酸Na(保湿成分) ※3、4 保湿成分

お問い合わせは右記までご連絡ください。

持田ヘルスケア株式会社
東京都新宿区市台本村町2番12号
0120-01-5050



持田製薬グループ



kaleido
TOUCH

病院と在宅をむすぶ看看連携アプリ

カレイドタッチ



在宅から病院に、患者さんの在宅の様子を。
病院から在宅に、患者さんの治療の方針を。



企業展示のご案内

カレイドタッチを企業展示会場にてて出展
しております。
皆様のご来場を心よりお待ちしております。

🔍 カレイドタッチ ✖

 ディピュラメディカルソリューションズ株式会社



製品ページはこちら

サラヤは創傷ケアによりそいサポート致します。

創傷ケアから治療まで



バイオフィルム 検出ツール

「創傷治癒を阻害する」とされる
バイオフィルムを臨床で簡便に
可視化します。

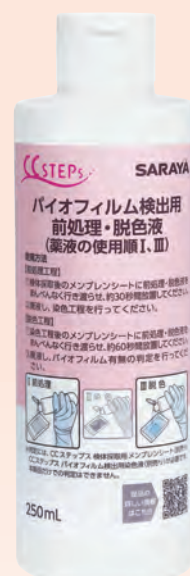
バイオフィルムの有無の判断に
より適切な創部管理を提供する
ことが可能となり、創傷治癒の
促進に貢献します。



CCステップス
検体採取用メンブレンシート



CCステップス バイオフィルム
検出用染色液 125mL

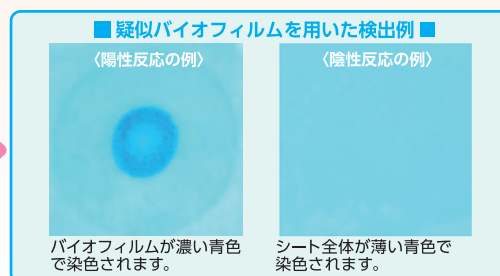
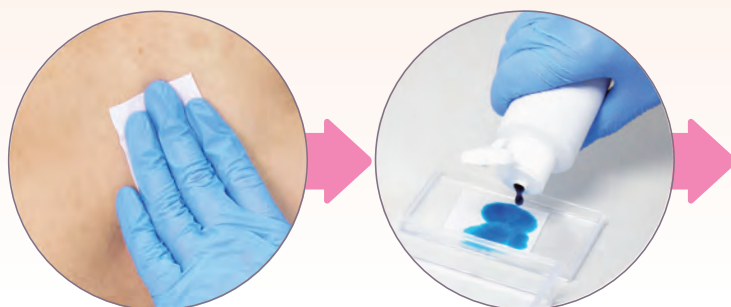


CCステップス バイオフィルム検出用
前処理・脱色液 250mL

一般医療機器届出番号 27B1X00120000601

※「CC ステップス 検体採取用メンブレンシート」のみ一般医療機器に該当します。
滅菌済です。

検出まで約2分！負担の少ない検出方法でバイオフィルムを検出



**PRIME
WASH**
プライムウォッシュ
泡薬用洗剤

医薬部外品

泡状 弱酸性



200mL 泡ポンプ付 500mL 泡ポンプ付

敏感な肌をいたわりながらしっかりと
洗い上げます。

- ・低刺激性の氨基酸系洗浄成分と15種の氨基酸を配合。
- ・有効成分として抗炎症成分を配合。
- ・なめらかで濃密な泡でやさしく洗浄し、すすぎにも時間をとりません。

**PRIME
MOIST
COAT**
プライムモイストコート
保湿・保護クリーム

化粧品

弱酸性



120g

乾燥や刺激からお肌を守る保湿・
保護クリームです。

- ・適度なうるおいで敏感なお肌を保湿します。
- ・のびが良く、なめらかでさっぱりとした使用感です。
- ・消臭成分を配合しています。

**温められる
ウェットタオル**



おしり、身体、手足などの汚れを拭き取る、
使い捨てタイプのウェットタオルです。

特徴：容器ごと繰り返し温めることができます。
保湿成分としてヒアルロン酸を配合しており、ふんわりとした素材でやさしい拭き心地です。厚手大判タイプで、破れにくく、おむつ交換時や清拭など様々な用途でお使いいただけます。皮膚刺激の少ないアルコール・パラベンフリー、無香料・無着色です。

※トイレには流せません。

●1枚サイズ(mm)：200×290

SARAYA

サラヤ株式会社
<https://med.saraya.com/>

〒546-0013 大阪市東住吉区湯里2-2-8 TEL.(06)6797-2525
【資料請求先】TEL.(06)4706-3938(学術部)(受付時間：平日9:00~18:00)



すべての人の健康のために

地域社会とつながり、**予防・医療・介護**のサービスを通じて「人」を支える

私たち八神製作所は

2021年、おかげさまで創業150周年を迎えました。

これまでの歴史を、これからの未来へつなぐ今

目の前の仕事のその先にある、健やかな人生を希って

予防・医療・介護の現場を支えること、

「地域」に寄り添いながら、頼られるサービスを届けることに

これからもひたむきに、取り組んでまいります。

YAGAMI
-Human Care Company-



株式会社 八神製作所

〒460-8318 愛知県名古屋市中区千代田二丁目16番30号

TEL. 052-251-6671 (代)

www.yagami.co.jp

福祉用具レンタル・介護用品販売の

ヤガミホームヘルスセンター

www.yagami.co.jp/yhhc

